

福沢諭吉

ペンは剣よりも強し

高山毅

青空文庫

この伝記物語語を読まえに

「天は人の上に人をつくらず、

人の下に人をつくらず。」

明治のはじめ、「学問のすすめ」で、いちはやく

人間の自由・平等・権利のとうとさをとき、

あたらしい時代にむかう日本人に、

道しるべをあたえた人。

それまでねっしんにまなんだオランダ語をすてて、

世界に通用する英語を、独学でまなんだ人。

アメリカやヨーロッパに三度もわたり、

自分の目でじつさいにたしかめた、

外国のすすんだ文化や思想をしようかいし、

大きなえいきようをあたえた人。

上野の戦争のとき、砲声をききながら、

へいぜんと講義をつづけた人。

福沢諭吉は、ながい封建制度にならされた人々を

目ざめさせるのは、学問しかないと、

けわしい教育者の道をえらびました。

いま、慶応義塾大学の図書館には、

「ペンは剣よりも強し。」

のことばが、ラテン語で書かれています。

諭吉の一生は、この理想でつらぬかれました。

日本の民主主義を考えるとき、

わたしたちはいつも、

諭吉にたちかえらなければなりません。

1 勉強はごめんだ

びんぼうどっくりをさげた少年

夏のはじめのある日の午後のことでした。

十二、三さいになる少年が、九州の中津（大分県）の町を、むねをはってあ
るいていました。こしに大小の刀をさしているので、士族（さむらいの家）の子
どもとすぐわかりますが、ふるぼけたふるしきづつみを左の小わきにかかえ、小
くりをその手にさげています。どうやら少年は、町に買いものきたかえりのよう
でした。

町人たちは、さも、ふしぎなものをみたといわんばかりに、少年のうしろすが
たをゆびさして、ささやきあいました。

「おさむらいの子が、まっ昼間、どうどうと、びんぼうどっくりをさげて、買
いものにくるとは、おどろいたな。」

「まったくだ。ちかごろは、おさむらいも、ふところぐあいがよくないとみえて、一しよ
う（一・ハリツトル）どつくりをさげて買いにみえるが、はずかしそうにほおかわりをし
て、しかも、日ひのくれがたとか、夜よるになつてから、買かいにくるといふのが、ふつうだから
な。」

「まあ、おさむらいには、士族しぞくとしての体面たいめん（せけんにたいするていさい）があるから
な。それを、あのようにどうどうと……いつたい、どこの子こどもだろう。」

町人ちやうにん たちがはなしている、その少年しょうねんは、じりじりとteriつける太陽たいようにあせば
んだのか、ときおり、右手みぎてで、ひたいのあせをふきながら、士族しぞくやしきへかえつていきま
した。

やがて、少年しょうねんがたちどまったのは、門もんこそありますが、ふるぼけた、そまつなかや
ぶきやねの家いえでした。

「ただいま、かえりました。」

少年しょうねんが、げんかんからはいると、

「おかえり、諭吉ゆきち。ごくろうだったね。とちゆうで、知しりあいの人ひとにあわずにすんだかね
。」

と、お母さんのお順がやさしくむかえました。

「ええ、だれにもあいませんでした。でも、だれかにあつたつて、わたしはへいきです。自分の金で、ものを買うんですから、すこしもはずかしいことはありません。」

「そうとも、そうとも。よくいつてくれました。母さんは、そのことばをきいて、とてもうれしいんだよ。うちがびんぼうでも、おまえがいじけないでそだつてくれるということだね。……そうそう、かえつてきてすぐでわるいけれど、たんすがあかなくなつたから、ちよつとなおしてもらえないかしら。」

「いいですとも。あかなくなつたのは、どのたんすですか。」

諭吉のひとみは、きゆうにいいきとかがやき、刀をいつものところにおくと、たんすのある部屋にかけこむようにしてはいつていきました。

「このたんすのひきだしなだけどね。」

あとからついてきたお母さんのいうのをきいて、諭吉は、そのひきだしのあちらこちらをしばらくはじめました。それから、かぎをつつこんで、まわしてみましたが、なかなかあきません。

「これは、かぎがこわれたんですね。くぎでなければ、あかないかもしれませぬ。」

「そうかい。では、くぎをつかつて、あくようにしておくれ。」

お母^{かあ}さんは、台^{だい}所^{どころ}のほうへさつていききました。

諭吉^{ゆきち}は、くぎをもつてきて、そのさきをまげて、かぎあなにさしこんで、あつちにまわしてみたり、こつちにまわしてみたり、いろいろとくふうをこらしめました。顔^{かお}のあたりを、かが四、五ひき、うるさくとんでいるのを手^てでおいはらいながら、かんがえこんでいます。両^{りょうあし}足をかわりばんこにあげているのは、かにさされなためでもありますが、便所^{べんじょ}にいきたいのをがまんしているためでもありました。それほど、ひきだしをあけるのにいっしょうけんめいになっていたわけです。

そのうち、ひきだしがすつとあきました。

「お母^{かあ}さん、あきましたよ。」

といったとたん、こらえていることができなくなったのでしよう、諭吉^{ゆきち}はバタバタと便所^{べんじょ}へはしりました。

なんだ、石^{いし}ころじやないか

ところが、そのとき、兄にいさんの三さん之助のすけが、ほご紙し（ものをかきそこなって、不用ふようになった紙かみ）を部屋へやいっぱいひろげて、整理せいりをしていました。

いつもなら諭吉ゆきちは、便所べんじよへいくのに、その部屋へやをとおらないのですが、いまはいそいでいるものですから、近道ちかみちをして、つい、ほご紙しをふんでしまったのです。すると、

「こりや、まてつ、諭吉ゆきち。」

と、兄にいさんが大おおきな声こえでしかりつけました。

「おまえは、目めがみえぬのか。これをみなさい。なんとかいてある。奥平おくだいら大膳だいでん大夫だいはう

と、とのさまのお名なまえがかいてあるではないか。」

と、えらいけんまくです。八はちつ年とし上じやうの兄にいさんのいうことですから、しかたがありません。

諭吉ゆきちは、

「ああ、そうでございましたか。でも、わたしは、つい、しらなかつたものですから。」
と、いいわけをしました。

「しらなかつたで、すむか。目めがあればみえるはずだ。とのさまのお名なまえを足あしでふむとは、なんたることか。臣子しんしの道みち（けらいや、子このまもるべきこと）をわきまえない、ふころえものだぞ、おまえは。」

「わたしは、とのさまを足あしでふんだわけではありません。たまたま、わたしのふんだほご紙しに、とのさまのお名なまえがかいてあつただけのことです。」

「だまれつ、とのさまのお名なまえのかいてあるものを、足あしでふみつけたことは、とのさまをふみつけたとおなじことだ。お父ちちうえ上うへが生きいておられたら、これをなんといわれるか、かんがえてみるがよい。」

日ひごろは弟おとうとおも 思おもいの兄にいさんが、ほんとうにかんかんになつておこつています。諭ゆ吉きちは便所べんじよにはやくいきたいので、いまは、あやまるよりほかに方ほう法ほうがないとおもいました。

「これは、わたしがわるうございました。これからは氣きをつけますから、かんになしてください。」

と、おじぎをしてあやまり、いそいで便所べんじよにいきました。やつと、ときはなされたような氣持きもちになりました。

しかし、氣きがおちついてくると、兄にいさんのことばには、なつとくのできないものがあります。

(なんだ、とのさまの頭あたまをふんだというのではない。ただ、名なをかいてあるほご紙しをふん

ただけのことだ。紙の上の字など、かまうことはないじゃないか。それを、兄さんはあんなにおこつたりして……。）

と、諭吉はふまんにおもい、そして、紙の上の文字を、ただたいせつにするということに、うたがいがわいてきました。

兄さんがいうように、とのさまの名のかいてあるほご紙をふみつけてわるいのなら、さまの名まえのかいてあるおふだをふんだら、どうなるだろうか。こうかんがえた諭吉は、さつそく、その夜、神だから、おふだを一まいとつて、こつそり足でふんでみました。ところが、べつにかわつたことはおこりませんでした。

（うん、なんともない。これはおもしろいぞ。よし、こんどは、便所にもつていつて、ためしてみよう。）

おもいきつて、便所の中へおとしてみました。なにごとかおこつたら、すぐとびだせるように用意して、こわさのために手足のふるえるのをがまんして、じつとようすをみていました。しかし、やはりなにごともおこりません。

（そうれ、みる。兄さんがよけいなことをいつてしかつたが、あんなことをいうのはおかしいんだ。）

と、諭吉はあんしんもし、また、かたくしんじることができたので、とくいにもなりま
した。

しかし、こればかりは、兄さんにはもちろん、お母さんにもねえさんにもはなせません。
はなせば、きつとしかられるにちがいありませんから、一人でそつと、自分の心の中にし
まっておきました。

諭吉は、兄さんのいうことになつとくがいかず、それをそのままにしておかずに、じつ
さいにためしてみても、自信をえたわけでした。すると、もつと、いろいろなことをためし
てみたくになりました。

諭吉のおじさんの家の庭のかたすみ、おいなりさんをまつた小さなほこらがありま
した。それを、大人たちは、しんみような顔つきでおがんでいます。が、いつたい、おいな
りさんの正体はどんなものか、それをしりたくてたまりません。しかし、大人たちは、
神さまの正体をみるなどということは、だいそれたことで、ばちがあたつて目がつぶ
れたり、手や足がまがつてしまうぞ、とおどかさばかりで、諭吉によくわかるようなせつ
めいをしてくれません。そこで、

(よし、ぼくがみてやろう。)

と、ある日、あたりに人のいないのをみすますと、いなりのほころのとびらを、そつとひらいてみました。おつかなびつくりであけたのですが、そのとたんに、

「なあんだ、石ころじやないか。」

と、おもわず声をだしたほどでした。ほころの中には、なんのへんてつもない石ころが、一つはいつているだけではありませんか。

みたところ、道ばたにころがつている石ころと、ちつともかわつたところはありませぬ。これに、なにかとくべつに神さまの力がやどっているのでしょうか。もし、そうだとすれば、この石ころをほうりだして、そのへんにころがつているべつの石をほころにいれたら、どんなことになるでしょうか。大人たちは、にせのおいなりさんをありがたがらなくなるでしょうか。

諭吉は、それをためしてみるために、ほころの石をとりかえておきました。

べつだん、なんのかわつたこともおこりませぬ。それどころか、あくる朝、おいなりさんをみにいくと、近所のおばあさんが、おみきとあぶらあげをそなえて、なにやら口の中なかでぶつぶつとなえながら、しんみようにおがんでいるではありませんか。

(あつはつはつ。ばかなおばあさんだな。ぼくの入れた石ころに、おみきとあぶらあげを

あげておがむなんて……。)

と、諭吉は、おかしさをこらえて、その場をたちさりしました。

けれども諭吉は、このことを、だれにもはなしませんでした。はなせば、しかられるにきまつているし、自分でも、けつしてよいことをしたとおもっていかなかったからです。それでも、このいたずらによって、神さまのばちがあたるなどということは、ありはしないのだということ、諭吉ははつきりとしることができました。

勉強なんて、だいきらい

諭吉は、このように、自分でなつとくのできないことについては、自分でじつさいにためてみるという、しつかりした少年でした。おまけに手さきがきょうなので、家ではたいへんちようほうがられていました。

いどにものがおちたといえ、どういふふうにしてあげたらよいか、その方法をかんがえだして、わけなくひきあげました。しょうじをはることなど、うまいもので、家のしようじはもちろん、しんるいからたのまれて、はりにいくこともありました。げたのはな

おもすげれば、たたみばりを買かつてきて、たたみのおもてがえまでやりました。ですから、ひまさえあれば、木のきれをけずつて、なにかをつくつていました。

あのおいなりさんの正しょうたい体をみてからも、諭吉ゆきちの生活せいかつには、べつだんかわつたこと
がありませんでした。

一年ねんたつて、また夏なつがやつてきました。

ある日ひ、お母かあさんがせんたくをしようとして、たらいをもちあげると、たががゆるんでいたのでしょうか、ばらばらにこわれてしまいました。あたらしいたらいを買かうほかないとおもわれました。しかし、諭吉ゆきちは、このばらばらにこわれたたらいをなおす役やくをひきうけました。

たけをわつて、たがのわをつくるのは、たいへんむずかしい仕事しごとですが、諭吉ゆきちはいろいろとかがえて、とうとう、もどおりのたらいになおしてしまいました。自分じぶんながら、よくやれたものだど、いささかとくいになつて、

「どうです、お母かあさん。こんなになりっぱになりましたよ。みてください。」
といました。

お母かあさんやねえさんは大よろこびでしたが、兄にいさんは、あまりよい顔かおをしません。

「諭吉、たらいのたがをなおすのもよいけれど、すこし勉強べんきょうをしたらどうだ。さむらいの子が、字じをならわず、まるで職人しよくにんがやるようなことばかりしているのは、みつともないぞ。」

せつかく、いい気持ちきもちになつているところへ、このようにきびしくいわれたので、諭吉ゆきちはむつとしました。

「兄にいさんは、わたしに勉強べんきょうしろというんですか。いやなことだ。勉強べんきょうなんて、わたしはだいきらいです。」

「では、きくが、おまえは、これからさき、なんになるつもりだ。」

「そうですね。まあ、日本にっぽん一の大金持ちおおかねもちになつて、おもうぞんぶんお金かねをつかつてみたいものですね。」

「なにっ、大金持ちおおかねもちになりたいだど？ 諭吉ゆきち、おまえは、それでもさむらいの子こか。さむらいの子こというものは、お金かねもうけなどかんがえてはならんぞ。おまえは、まだ小ちひさかつたからおぼえてもいまいが、お父上ちちうえはな、さむらいの子こが金かねかんじょうなどならうものじゃないといつて、わたしがかよつていた手てならいの先生せんせいが、かけぎんの九く九くをおしえたら、そんな先生せんせいのところへ子こどもをあずけられないといつて、おこられたことがあ

るくらいだ。お父上は、りつぱな学者だった。その血をひいたおまえが、勉強は
だいきらいだなんていって、はずかしいとおもわぬか。」

「わたしは、勉強がきらいなんですから、しかたがないじやありませんか。それに、
さむらいの子がお金のことをいって、どうしてわるいんですか。うちだって、もつとお金
があつたら、どんなにいいか。兄さんだって、心の中では、そうおもっているくせに。」

「へりくつをいうな。おまえのさきざきのことをかんがえて、勉強するようすすめ
てやっているのに、おまえは、それがわからんのか。なんというばかものだ。そこへすわ
れ、お父上にかわつて、おまえのしようね（こころね）をたたきなおしてやるから。」
兄さんは、そばの木刀をとつて、諭吉のほうへ、あらあらしい足どりでつめよりまし
た。このとき、

「おまちなさい、三之助っ。」

と、お母さんが、中にわつてはいました。

「兄弟げんかはいけません。諭吉の勉強強ぎらいは、母さんにもせきにんがありま
す。家がまずしいものだから、つい、諭吉に家の手だすけばかりをしてもらっていました。
諭吉には、母さんから勉強強するよういいいきかせますから、この場はかんにんしてや

つておくれ。」

木刀ぼくとうをもつてたつている兄にいさんの足あしもとに、お母かあさんはきちんとすわつて、頭あたまをたみにすりつけんばかりにして、たのみました。兄にいさんも、こしをおろして、木刀ぼくとうをかたわらにおき、お母かあさんのまえに、だまつて頭あたまをさげていました。お母かあさんのうしろには、諭吉ゆきちがおなじように、頭あたまをさげていました。

おんな
女おんなこじきをいたわるお母かあさん

それから二週しゅうかん間かんもたつたでしようか。よくはれた日ひのお昼ひるちかくに、着物きものはぼろぼろ、かみはぼうぼうの女おんなこじきが、諭吉ゆきちの家の門いえもんの外そとにたち、はいるうか、はいるまいかと、ためらつていました。それを、せんたくものをほしていた諭吉ゆきちのお母かあさんが、目めざとくみつめました。

「まあ、おチエじやないか。ひさしぶりだね。さあ、こちらへおはいり。」
と、庭にわのほうへよびいれました。おチエはすなおに庭にわのほうへはいつてきましたが、右みぎ手で頭あたまをなんべんもかいています。

「おや、おチエは、また、しらみをわかしたとみえるな。さあ、そこへおすわり。わたしがとつてあげるから。」

と、庭にわの草くさの上うへにすわらせ、

「諭吉ゆきちや、ちよつときて、てつだつておくれ。」

と、土間どまで木きぎれをけずつてゐる諭吉ゆきちに声こゑをかけました。諭吉ゆきちは、すぐにでてきましたが、

「ああ、また、しらみたいじですか。おチエは、からだがかくさいから、いやだなあ。」
と、鼻はなをおさえながらいいました。

お母かあさんはいつも、おチエのしらみをとつてやるのでした。そのとつたしらみを、庭にわの上うへにおきます。しらみはいだそうとします。それを、小石こいしをもつてつぶすのが、

諭吉ゆきちの役目やくめでした。諭吉ゆきちは、こればかりは、きたなくて、きたなくて、むねがわるくなるようでした。でも、お母かあさんのいつけなので、いつもがまんして、てつだいました。

おチエは、中津なかつの町まちでは、だれからもばかにされていました。それなのに、諭吉ゆきちのお母かあさんは、士族しぞくとしての身分みぶんなどにこだわらず、よくおチエのめんどうをみてやるのでした。

「まあ、こんなに、しらみがうようよわいては、おチエもかゆかったらうね。これからは、かみをよくあらうようにして、しらみをわかすんじゃないよ。」

と、まるでおさない子どもにでもいうように、おチエに教えさとしながら、しらみをつぎつぎにとります。諭吉も、いそがしくしらみをつぶします。

おチエは、さもうれしそうに、ときおり、にたつとわらってみせています。そのうち、頭がかゆくなくなつて、気持ちがよくなったのか、おチエは、ねむたそうに、こつくりをはじめました。

「さあ、そつとしておいてやりましょう。諭吉、おチエの顔をみてごらん。よいゆめでもみているのか、うれしそうな顔をして、まるでほとけさまみたいじゃないか。」
と、お母さんがいいました。諭吉は、

「ええつ。」

とおどろきました。そういわれて、おチエの顔をみると、なるほど、お母さんのいうことがわかるような気持ちになりました。

これまで女こじきをいたわるお母さんを、ふうがわりなお母さんだとおもっていたのですが、人間は、わけへだてなくしんせつにしなければならぬということがわかり、
「お母さんはえらいな。」

と、あらためてお母さんをそんけいしたくなりました。

「諭吉ゆきちや、母かあさんは、このあいだから、おまえにいつてきかせようとおもっていたことが
あります。おまえは、兄にいさんに、なんになるつもりだときかれて、大金おおがねも持ちになりた
いとこたえましたね。けれど、兄にいさんのいわれるように、勉べんきよう強きやうはやはりしてもらいたい
とおもいます。なくなられたお父とうさまは、おまえをおぼうさんにしたいといわれていたん
ですよ。」

「えつ、わたしをおぼうさんにするつて、ほんとうですか、お母かあさん。」

「ほんとうですとも。それには、すこし、わけをはなさなければ、おまえには、わからな
いかもしれないが……。」

こういつて、お母かあさんがはなしてくれたのは、つぎのようなことでした。

お父とうさんのえがいたゆめ

諭吉ゆきちのお父とうさんは、福沢百助ふくざわひやくすけといい、中津なかつのとのさまのけらいでした。ひじょうに
しようじきで、まじめな人ひとであり、また、学問がくもんのすきな、すぐれた漢学かんがくしや者しやでした。け
れども、身分みぶんがひくいたために、つまらない役職やくしやくにがまんしていなければなりません。

した。

それは、江戸幕府のおわりにちかいころでしたが、そのころの日本の社会は、まだ、さむらいがいちばんえらいとされていきました。町人やひやくしようたちは、いつも、さむらいにいじめられていました。

さむらいの家に生まれたものは、どんなにつまらない人間でもさむらいになり、いばることができました。町人やひやくしようの子どもは、いくらすぐれた人間でも、さむらいにはなれませんでした。また、さむらいの中でも、身分のたかいものと、ひくいものとのわけられていて、身分のひくいさむらいの子は、身分のたかいさむらいの子より上の役目につくということは、ゆるされませんでした。

そんなわけで、諭吉のお父さんは、りっぱな人でしたが、つまらない役目にしか、つくことができませんでした。

中津のとのさまは、大阪の堂島にくらやしきをかまえていました。このくらやしきは、どこのとのさまもついていたもので、自分の国でとれる米や、名産・特産の品々を、このくらやしきにおくつてきて、それを大阪の商人に売りわたして、自分の国の財政をまかなうことになっていました。

諭吉のお父さんは、そのくらしきにつとめて、回米方という役についていました。回米方というのは、このくらしきにおくりこまれてきた米の見はりの番をしたり、商人に売ったりする仕事で、ずいぶん、せきにんのおもい役目でした。けれども、そのころのさむらいは、刀をつかうような役につくものはだいにされませんが、お金のかんじょうなどをやる役目のものはみさげられていました。この回米方もまた、みさげられる役目だったのです。

諭吉は、そのお父さんのすえつ子として大阪で生まれました。いちばん上が兄さんの三之助で、その下に三人のねえさんがありました。女の子が三人つづいたあとに、男の子が生まれたのですから、お父さんは大よろこびでした。

「おまえが生まれたときは、やせてはいたけれど、ほねぶとで、じょうぶそうな大きなあかちゃんだったものだから、さんばさんが、『ちちをたくさんのませれば、りっぱにそだちますよ。』というのをきいて、お父さまは、たいへんおよろこびになってね、『これはよい子だ。十か十一になつたら、お寺へやつて、りっぱなおぼうさんにしよう。』とおっしゃったのですよ。そののちも、口ぐせのように、『おぼうさんにしたい。』とおっしゃっていました。

ところが、おまえがかぞえ年で三つのときに、お父さまはなくなりました。それで、母かあさんは、おまえたちをつれて、中津なかつへかえってきたわけだけだね。もし、お父とうさまが生きておられたら、おまえは、いまごろは、どこかのお寺てらの小こぞうさんになっているところだよ。」

と、お母かあさんがいいました。

「でも、わたしは、おぼうさんはきらいです。お父ちちうえ上えは、どうして、わたしを、おぼうさんにしようとなさつたのですか。」

「さあ、それは、母かあさんにも、よくわかりませんがね。まあ、りっぱなおぼうさんになるには、勉べんきよう強きやうをうんとしなければなりません。お父とうさまは、学問がくもんのすきなかたでしたから、おまえに勉べんきよう強きやうをしてもらいたかつたのじやないかとおもいます。どうだろ、おぼうさんになつては……。」

「おぼうさんになるのだけは、かんべんしてください。そのかわりに……。」

「そのかわりに？」

「勉べんきよう強きやうをします。」

諭吉ゆきちのしんけんな顔かおつきをみて、お母かあさんは、いかにもうれしそうに、にっこりとしま

した。

「さあ、それでは、おチエがまもなく目をさますでしよう。おにぎりでもつくってやることにしましょう。わたしたちも、お食事しよくじをしなくてはならないね。」

気持ちよさそうにひるねをしているおチエの顔かおをみながら、お母さんかあは、台所だいどころのほうへはいつていきました。あとにのこった諭吉ゆきちは、おぼうさんにならずにすんだので、ほつとしました。

勉強べんきょうをすることは、このあいだ、兄さんにいからいわれて、なるほどとおもい、自分じぶんでも、やらなければならぬな、とかんがえるようになっていたので、それほど苦くにはならなかつたのです。勉強べんきょうなんてだいきらいだといつていた諭吉ゆきちが、すすんで勉強べんきょうするといいだしたことを、お母さんかあからきいて、兄さんにいはとてもよろこびました。

といつても、いまのような学校がっこうはありませんから、勉強べんきょうするといえは、ちかくにある塾じゆく(むかしの学校がっこう)にかようほかありません。そこへかよつて、漢字かんじがいつぱいまつた中国ちゆうごくの本ほんをならうのです。それを漢学かんがくといいました。生徒せいとは、七、八さいの小さな子こから十三、四さいまでのものばかりで、諭吉ゆきちがいちばん年上としうえですから、たいへんきまりがわるいことでした。けれども、負けん気まきのつよい諭吉ゆきちは、

「なあに、いまにしろ、みんなにおいてやるから。」

と、心をふるいたたせて、むちゆうで勉強にはげみました。そのため、みるみるうちに、おなじ年ごろの子どもたちにおいつき、やがて、その子どもたちをおいこしてしまいました。

塾は二、三回、かわりましたが、その中で、いちばんたくさん本をならったのは、白石常先生でした。漢学がおもでしたが、諭吉は歴史がすきで、すきな本は、何回もよみ、暗記してしまうほどでした。

十五、六さいごろになると、諭吉は、ふるいおきてや、わるいならわしにたいして、まえよりもいつそう、ぎもんをもつようになりました。身分のちがいのことは、子どもどうしの中にもあつたからでした。第一に、ことばづかいがちがうのです。諭吉たち下つぱの家のものは、身分の上の家の子にむかつては、

「あなたが、ああおつしやつた、こうなつた。」

と、ていねいにいわなければならぬのにたいして、あいては、

「きさまは、ああいつた、こうしろ。」
といつたちようしです。

塾じゆくのせいせきは、諭吉ゆきちのほうが上うえですし、からだもつよくしつかりしていながら、頭あたまが
 ありません。それは、親おやの家いえがらや身分みぶんがちがうためにできたわけへだてでした。それ
 が、諭吉ゆきちにはくやくしくてくやくしてたまりません。すると、お父さんとうが、自分じぶんをおぼうさ
 んにしようとした気持ちきもがわかつてくるようでした。

諭吉ゆきちのお父さんとうは、学問がくもんのあるりっぱな人ひとでしたが、身分みぶんがひくいために、つまらな
 い役目やくめにがまんしていなければなりません。ところが、おぼうさんだけは、出世しゅっせ
 する道みちがあつたのです。たとえば、さかな屋やのむすこや、ひやくしようの子こであつても、い
 つしんふらんに勉べん強きやうし、しゆぎようをすれば、えらいおぼうさんになる道みちがひらけて
 いました。そうなれば、さむらいはもとより、もつと上うえにいるとのさまや将しょう軍ぐんにも、
 せつきよう（ときおしえること）をすることができすし、とうとばれ、うやまわれもし
 たのです。

お父さんとうは、そこに目めをつけて、

（子どもに、自分じぶんとおなじように、いきのつまりそうにきゆうくつで、ふこうな一生しよつをお
 くらせたくない。もつて生まれうたさいのう 生まれうつきちからの力ちからを、のびるだけのばさせて
 やりたい。）

きつと、そうかんがえられたのだ、と諭吉はおもいました。

（おお、そうだったのか。それに気がつけば、もつとはやく勉強にとりかかるとだつたのに。これはぼやぼやしておれないぞ。だが、わたしがおぼうさんになれば、わたし自身はすぐわれるかもしれない。けれども、おなじような人がせけんにはたくさんいるのだ。それらの人々のふこうをほうっておくわけにはいかない。

いちばんだいじなことは、このようふるいおきてや、わるいならわしを、一日もはやくうちやぶることだ。封建制度をなくすことだ。封建制度こそ、お父さんのかたきだ。にくいにくいかたきだ。）

と、諭吉は、はつきりかんがえるようになりました。

中津の町からでていきたい

ところが、封建制度というものは、ながいあいだにきずきあげられたものですから、ちつとやそつとの力でくずれるものではありません。そのころの日本は、どの土地も、このふるいおきてでおさめられていましたが、とりわけ、九州のいなかである中津は、

それがつよいのでした。

ですから、この町をとびだして、すこしでも自由なところに行かなければ、一生、このままでおわつてしまう、と諭吉はしみじみとかんがえるようになりました。

兄さんの三之助は、お父さんのあとをついで、下つぱの役人になっていました。いとこたちも、仕事についているものは下つぱの役人ばかりでした。三、四人あつまると、身分のたかい家のむすこが、たいした力もないのに、よい役についていざるとか、自分たちは、力があつても、どうにもならぬのだ、とふへいをもらしあいました。

諭吉も、そのふへいにはおなじ思いでしたが、ぐちのいいあいになつたのでは、いみのないことだとおもいました。そこで、こういうのでした。

「まあ、そんな話はやめようじやありませんか。この中津にいるかぎりには、なんべん、そんなことを、ぐずぐずいつても、役にたちませんよ。ふへいがあつたら、でていくことです。でていかないのなら、ふへいをいつたつてはじまりませんよ。」

「いつたな、諭吉。ばかに大きな口をきくではないか。それなら、きみは、中津をでていくというのか。」

「さあ、それは、なんともいえませんがね。」

あまり、はつきりしたことをいえば、どんなうるさいことがおこるかもしれませんから、諭吉はことばをにごしました。しかし、このころから、心の中では、中津からでていくことを決心して、その決心を、なんとしてでも実行しようと、おもいさだめました。そうして、ひそかにじゆんぴをはじめたのでした。ちようど、白石先生のところでいっしょに勉強している生徒の中に、諭吉よりももっとまずしい人が二人いました。その二人は、あんまを内職にして、勉強しているのです。

そのことをきいて、諭吉は、

（これは、よいことをきいた。自分も、そのうち中津からとびださなければならぬが、あんまを内職にすれば、兄さんからお金をだしてもらわなくてもすむ。）

そうおもつて、さつそく、その二人に、あんまをおしえてもらい、しきりにけいこをしました。もともと、手さきがきょうなので、すぐこつをおぼえ、お母さんをじっけんのあいてにしました。

「白石先生のところでは、学問ばかりおしえるのかとおもっていたら、あんまのやりかたもおしえてくださるのかね。ああ、いい気持ちだ。諭吉のうでまえは、なかなかたいたものだよ。」

と、お母さんは大よろこびです。

もとより、お母さんは諭吉が中津をとびだそうとしていることをしりません。けれども、

諭吉は、その日のくるのを、じつとまっていたのでした。

そうして、諭吉がかんがえていることのあらわれる日が、目にみえないところで、すすんでいきました。時代が大きくうごいてきていたのです。

2 ほこりたかき書生しよせい

西洋せいようのまど、長崎ながさき

諭吉ゆきちのまちのぞんでいたときが、やがておとずれました。それは、諭吉ゆきちが二十一さいとなつた、安政元あんせいがん（一八五四）年ねん二月がつのことでした。

そのまえの年としの六月がつに、アメリカから、ペリーが軍艦ぐんかん四せきをひきいて浦賀うらが（神奈川かながわ県けん）にやつてきて、

「国くにをひらいて、ぼうえきをしようではないか。」
と、はげしくせまりました。いやだというなら、大砲たいほうをうちこんでも、うんといわせるといういきおいでした。これは、江戸幕府えどばくふにとっては、たいへんむずかしいもんだいでした。

というのは、江戸幕府えどばくふは、それまで、およそ三百年ねんちかくのあいだ、外国がいこくとのつきあいをせず、品物しなもののとりひきなどもしないことにしていました。ですから、世界せかいの国々くにぐに

のようすは、なにもわかりませんし、また、どうなっているかをしろうともしませんでした。これを「鎖国」といいます。つまり、国をとじて、外国をしめだしてしまつたわけでした。ただ、中国とオランダとだけは、長崎でぼうえきをすることがゆるされていきました。

なぜ、幕府が国をとぎしたかといいますが、それは、キリスト教が日本にはいつてくるのをおそれたからでした。中国とはとなりどうしで、まえまえからのつきあいであり、キリスト教の国ではないから、そのままつきあつたのですが、オランダとは、キリスト教を日本へひろめないというやくそくで、ぼうえきをしていました。

ところが、こんど、キリスト教をしんずるアメリカが、日本に国をひらかせて、自由にぼうえきをやろうといつてきたのです。こまつた幕府は、ペリーのさしだしたアメリカ大統領からの手紙だけをうけとりました。ペリーは、へんじは一年のちにもらうからといつて、かえつていきました。

さあ、それからがたいへんでした。国をひらこうといふ考えの人と、外国人はみなおいはらえといふ考えの人と、日本は二つにわかれました。しかも、京都の天皇のわは、国をひらきたくない考えだったので、幕府は、外国との板ばさみになつたかつこ

うでした。

でも、ぐずぐずしてはいられません。一年ねんたつたら、ペリーがまたやってきます。もしも、「アメリカのいうとおりにはできない。」というへんじをすれば、軍艦ぐんかんから大砲たいほうをうつてくるかもしれない。そこで、幕府ぼくふは、品川しながわのおきに、砲台ほうだい（大砲たいほうをすえたじん地ち）をつくつて、江戸えど（いまの東京とうきょう）の城しろをまもうとしました。そのためには、砲術ほうじゆつ（大砲たいほうのつかいかた）をまなばなければならぬと、やかましくいわれはじめました。

あちこちのとのさまたちのあいだでも、けらいに砲術ほうじゆつをまなばせることがはやってきました。もちろん、中津なかつにも、このことがつたわつてきました。人々ひとびとは、にわかには砲術ほうじゆつというものに心こころをむけはじめました。

その砲術ほうじゆつをまなぶには、オランダからまなぶよりほかありません。それには、どうしてもまずオランダ語ごを勉強べんきやうして、オランダ語ごでかいた本ほんがよめるようにならなければなりません。

ある日ひ、兄にいさんの三之助さんのすけが、諭吉ゆきちをよんで、いいました。

「どうだ、諭吉ゆきち。オランダ語ごを勉強べんきやうして、原書げんしょ（外国語がいこくごでかかれた本ほん）をよんで

みる気はないか。」

いきなり、こんなことをいわれたので、諭吉は、目をまるくしました。それに、原書
 ということばははじめてきいたことばなので、

「その原書げんしよっていうのは、なんですか。」
 とときかえました。

「オランダ語ごでかいた本ほんのことだよ。日本語にほんごにも、かなりほんやくされているけれども、
 だいじなところだけをみじかくかいたり、ときには、まちがってほんやくしたところがあ
 るそうだ。だから、砲術ほうじゆつをほんとうにするには、自分で、その原書げんしよをよまなければ
 ならないんだ。」

「ずいぶんむずかしいんでしようね。」

「それは、むずかしいにきまつているさ。けれども、原書げんしよをよむことができれば、ほん
 とうのことがわかるからおもしろいぞ。どうだ、やってみないか、諭吉ゆきち。」

「やりましょう。どうせ、人ひとのよむものなら、横文字よこもじであろうが、なんであろうが、やれ
 ないということはないでしょうから。」

諭吉ゆきちの負けまずぎらいな気持きもちが、むくむくと、むねの中なかにわきあがって、そういわせま

した。

「そうだとも。おまえなら、その氣にさえなれば、きつとやれるとおもうよ。」
と、兄さんは、につこりわらいました。

けれども、中津には原書もなければ、おしえてくれる先生もありません。オランダのことばを勉強するには——それを蘭学といっていました——、長崎へいかなければなりません。長崎だけが、そのころの西洋の文明がながれこむ、一つのまどのようなどころだったのです。

さいわいなことに、兄さんが、役所の用事で長崎へでかけることになったので、諭吉もいつしよにいくことになりました。

(中津からとびだしたい。)

という諭吉のきぼうは、こうしてかなえられたのでした。

数日ののち、長崎についた諭吉は、桶屋町の光永寺という寺にきました。ちようどそのころ、中津の家老(大名・小名のけらいの長)の子の奥平壺岐というわかいさむらいが、砲術の研究のためにやってきて、ここにどまつていたからです。それで、この人にたのんで、お寺にやつかいになりましたが、半年ほどのちには、

やはり壱岐のせわで、砲術研究家の山本物次郎という人の家で、はたらきながら、オランダの学問をまなぶことになりました。

ところが、山本先生は目がわるくて、本をよむことが不自由なので、諭吉は、世の中なかのうごきなどについて、いろいろな先生がたの漢文かんぶんでかいたものをよんであげたり、手紙てがみをかわりにかいてあげたりしなければなりません。また、山本先生にはむすこがひとり一人ありましたが、その子に漢文かんぶんをおしえる家庭教師の役も、仕事の一つでした。

それから、山本先生の家はくらしむきは大きいのですが、びんぼうで借金しやつきんがあるものですから、そのいいわけをしたり、ときにはお金をかりにいかなければなりません。下男げなん（男の使用人）が病氣びやうきになれば、水くみもしました。女中じよちゆう（女のおてつだいさん）にさしつかえがあれば、台所だいどころのてつだいもしました。ふきそうじはもちろん、先生せんせいがふろにはいられると、せなかをながしてあげたり、生きもののすきなおくさんの飼かつているいぬやねこのせわもしなければなりません。

こんなに、うちの中なかのぎつようでもなんでも、諭吉ゆきちは、すこしもいやな顔かおをしないで、かいがいしくはたらくので、先生せんせいばかりでなく、おくさんにも、女中じよちゆう中ちゆうにも、家じゅうで、たいへんちようほうがられました。

そのころの砲術家は、じつさいに大砲をつくったり、大砲のうちかたのけいこをするわけではありませんでした。ただオランダの砲術の本をいろいろもっているというのと、それをよんでせつめいができるというだけでした。

その本をお礼をとつてかしたり、それをうつしたいといえ、うつすためのお礼をとるというわけで、そのお礼が山本家の収入になります。その本をかすのも、うつすのも、山本先生は目がわるいので、みな諭吉がかわつてやりました。

大砲をつくるための設計図がほしいとか、出島のオランダやしきを見たいとかいつてくる人があります。それらのせわをするのも山本先生の仕事でした。設計図など、諭吉は、じつさい大砲をうつのはみたこともないのですが、図面をひくだけなら、もとも手さきがきようなものですから、わけはありません。さつさと図をひいたり、せつめいをかいてわたします。

諭吉は、全国からあつまってくる人たちをあいてにして、まるでもう、十年もまえから砲術をまなんだ、りっぱな砲術家だとおもわれるほどに、人にあつてこたえられないようになりました。

こうした、いそがしい仕事を、てきぱきとやつてのけるあいまには、諭吉は自分の勉強

強ようをもわすれませんでした。もともと長崎ながさきにでてきたもくてきは、原書げんしよがよめるようになるということでしたから、オランダ流りゆうの医者いしやや、オランダ語ごのつうやくをする人ひとの家いえなどにいつて、いつしんふらんに原書げんしよの勉べんきよう強ようをしました。諭吉ゆきちは、原書げんしよというものをはじめてみて、

(これはむずかしいぞ。)

とおもいました。それはむりもありません、アルファベット二十六字じをおぼえてしまうのに、三日みつかもかかったのですから。けれども、五十日にち、百日にちと日ひがたつにつれて、だんだんよめるようになり、いみもわかるようになってきました。

こうなると、おもしろくないのは、奥平おくだいら壱岐いっきでした。壱岐いっきは身分みぶんのたかい家老かろうのむすこで、諭吉ゆきちより十さいぐらい年上としうえです。はじめせんぱいぶって、あれこれとおしえてくれていたのですが、そのうちに、砲術ほうじゆつについても、オランダ語ごについても、諭吉ゆきちのほうが上うえになつて、壱岐いっきはそれまでとはあべこべに、諭吉ゆきちからおそわらなければならなくなりました。それが、壱岐いっきにはしゃくのたねでした。

それなら、いっしょうけんめいに勉べんきよう強ようすればよいはずですが、なにしろおぼっちゃんのごとですから、自分じぶんでどりよくするということがありません。ただ、諭吉ゆきちが目の上うえの

こぶのようにおもわれてきました。そこで、わるぢえをおもいつきました。

家老のむすこのわるぢえ

諭吉が長崎へきてから、一年あまりたつたときでした。中津の藤本元岱という、
医者をしているところから、とつぜん手紙がとどきました。

「お母上さまが、おもい病気になるれました。すぐかえつてこられるように。」
といういみの手紙でした。よんでいく諭吉の顔からは、みるみるうちに血のけがひいてい
きました。

兄さんの三之助は、なくなつたお父さんとおなじように、大阪のくらしきにつと
めており、三人のおねえさんはみなよめ入りして、ふるさとの中津のうちには、年をとつ
たお母さんのお順が一人いるだけなのです。

それにしても、あんなにじょうぶなお母さんが、いったいどうなつたのかと、うその
ようにおもわれてなりません。けれども、どうじに、一人心ほそくねておられるお母さん
のすがたをおもうと、諭吉は、じつとしていられないほどでした。その手紙をくりかえし

よんで、諭吉は男なきになきました。

ところが、ふと、いとこからは、もう一通の手紙がきていることに気がつきました。それをいそいでよんだ諭吉の顔には、血のけがよみがえってきました。

「お母上さまのご病氣というのは、うそです。じつは、こういうわけがあつて……。」と、その手紙には、つぎのようなことがかかれていました。

それは、奥平壱岐のしくんだひきようなはかりごとだったのです。諭吉が長崎へきたとき、壱岐はおなじ中津のものだというので、めんどうもみてくれたし、なつかしがりもしました。けれども、自分よりも身分のひくい諭吉が、勉強がどんどんすすんでいき、ひょうばんのよくなつていくのを見て、これでは、自分のねうちがさがつてしまうとおもひこみました。

なんとかして、諭吉を長崎からおいだしてしまおうとかんがえて、そのことを中津の父親にしらせてやったのでした。父親というのは家老ですが、自分のむすこにたいしてはとてもあまい親ばかりでしたから、諭吉のいとこ藤本元岱をよびつけて、

「諭吉が長崎にいては、せがれ壱岐の出世のじやまになるから、中津へよびもどしてくれ。ただし、そのりゆうには、母が病氣だといつてやれ。」

と、きびしいめいれいです。家老^{かろう}じきじきのめいれいですから、ことわるわけにいきませ
ん。

「かしこまりました。」

とこたえて、諭吉^{ゆきち}のお母さん^{かあ}にも話を^{はなし}して、そうだんのけっか、おもてむきは、家老^{かろう}のめ
いれいどりの手紙^{てがみ}を^{かいて}、もう一通^{つう}には、このいきさつを^{かいて}、

「ほんとうは、お母さん^{かあ}は元氣^{げんき}ですから、けっして心配^{しんぱい}するな。」
とかいてやったのでした。

これをよんだ諭吉^{ゆきち}のむねは、いかりのために、ばくはつしそうになりました。

(なんと^ういうひきようなわるぢえだ。よしつ、この手紙^{てがみ}を^{みせて}、壺岐^{いぎ}をとつちめてやろ
う。)

と、いちじはかつとなりましたが、

(いやいや、までよ。いま、ここでけんかをしたところで、身分^{みぶん}がちがうから、こつちが
まけるにきまつている。それに、壺岐^{いぎ}だつて、それほど悪人^{あくにん}ではないのだ。)

と、ぐつとがまんをしました。

(けれども、こういうことを^{きいて}は、この長崎^{ながさき}にもいたくない。お母さん^{かあ}が元氣^{げんき}な

んだから、中津へかえることもない。どうすればよいか。」

と、さんざんにかんがえこんだすえ、

（そうだ、江戸へいこう。江戸にも、りっぱな先生がおられるはずだ。）

こう決心した諭吉は、なにもしらないふりをして、壱岐のところへ、おわかれのあいさつにいきました。

「じつは、中津のいところから、母がきゆうに病気になつたから、すぐかえってくるようにとしらせてまいりました。ふだんは、いたつてじようぶなほうでしたが、わからないものです。いまごろはどういうようすでしょうか。とおくはなれていますと、気になつてなりません。」

と、心配そうに、いろいろのべたてますと、壱岐も、さもおどろいたような顔をして、

「それは、きのどくなことじや。さぞ心配であろう。とにかく、一日もはやくかえったほうがよからう。しかし、母上の病気がなおつたら、また、長崎へこられるようにしてやるから。」

と、なぐさめ顔にいうのでした。

「それでは、おさしずどおり、さつそく国へかえりますが、お父上さまにおことづては

ございませんか。いずれかえりましたら、お目にかかります。また、なにかおとどけする品物がありましたら、もつてまいります。」

と、一どわかれをつけて、つぎの朝、またいつてみますと、壱岐は自分の家いへにやる手紙てがみをだして、これをやしきへとどけてくれ、それからお父上ちちうへにあつたら、これこれつたえてくれといい、またべつに、諭吉のお母さんかあのいとこにあたる大橋六助おおはしろうくすけという人ひとにあてた手紙てがみをとりだして、

「これを大橋おおはしのところへもつていけ。そうすると、きさまがまた長崎ながさきへでくるのにつごうがよいだろう。」

と、わぎとその手紙てがみにふうをせず、あけてみよといわぬばかりにしてありますから、

「なにもかも、いさいしようちいたしました。」

と、ていねいにわかれをつけました。うちにかえつて、ふうなしの手紙てがみをあけてみますと、「諭吉ゆきちは母の病氣はまびようきにつき、どうしても国くにへかえるというから、しかたなしにかえらせるが、まだ勉強べんきようのとちゆうの身みのうえだから、また長崎ながさきへでてくることができるように、そちが、よくとりはからつてやれ。」

というもんです。諭吉は、これを見て、ますます、しやくにさわりました。

（いまごろは、けいりやくがうまくいったと、とくいになつてゐるにちがいない。このさるまつ 壱岐のあだ名 めつ、ばかやろう。）

と、はらの中で、さんざんののしりました。けれども山本先生にも、ほんとうのことはいえません。もし、この話がわかつて、奥平というやつはひどいやつだということにでもなれば、わざわざはかえつて諭吉の身にふりかかつて、どんなめにあうかしれません。それがこわいので、

「母が病氣になりましたので、中津へかえらなければならなくなりました。」
 といつて、いとまごいをしました。

ただしい 勉強の第一歩

ちょうどそのとき、中津からくろがね屋惣兵衛という商人が長崎にきていて、用事がすんだので、中津へかえることになつていました。諭吉は、その男といつしよにかえらうとやくそくをしておいたのですが、もとより中津へかえるつもりはありません。心は

江戸へむかつていました。といつても、江戸にはたよつていくところがありません。

さいわい、江戸から長崎へ勉強にきている書生なかまに、岡部という青年がいました。しつかりした人物ですし、そのお父さんは、江戸で医者をしていました。

「ひとつ、きみにおねがいがあるんだけど。もし、わたしが江戸へいったら、きみのお父さんの家のげんかん番にしてくれるよう、きみからたのんでももらえまいか。」

とたのみますと、

「いいとも。日本橋にいつて、医者の岡部ときいてもらえば、すぐわかるよ。」
と、さつそく手紙をかいてくれました。

こうして、三月のなかばごろのある日、諭吉たちは長崎をたつて、諫早（長崎県）へむかいました。そこへついたのは、月のあかるいばんでしたが、諭吉は、くろがね屋にむかつていいました。

「ところで、くろがね屋。おれは長崎をでるときに、中津へかえるつもりであつたが、きゆうにかえるのがいやになつた。これから下関へでて大阪へむかい、それから江戸へいくことにした。ついては、めんどうでも、このにもつと手紙をどけてはもらえまいか。」

「それは、とんでもないことです。あなたのような年のわかい、旅たびになれないおぼっちゃんが、一人ひとりで江戸えどへおいでになるなんて。」

と、くろがね屋やは、びつくりしてとめました。けれども、諭吉ゆきちはかたく決心けっしんしたことです。くろがね屋やとわかれて、一人旅ひとりたびをつづけ、下関しもせきから船ふねにのりました。

ところが、この船ふねは、京きょう・大阪おおさかなどを見物けんぶつにでかける人々ひとびとをのせた船ふねでしたから、そのとちゆうでも、あちらこちらのみなとによつて、見物けんぶつをしたり、船ふねの中なかでは、ごちそうをひろげて酒さかもりをしてさわいんだり、まことに船ふねのすすみぐあいがおそいのです。

諭吉ゆきちは、勉強べんきょうにでかけようとはりきつているのですから、ばかばかしくてしかたがありません。十五日いちにちめに、やつと明石あかし（兵庫ひょうご県けん）についたとき、船ふねからおろしてもらいました。これから大阪おおさかまであるこうとうのです。それでも船ふねよりはやく大阪おおさかにつくことがわかったので、船ふねからおろしてもらったのでした。

大阪おおさかまでは十五里り（やく六十キロ）あるとききました。お金かねがないものですから、すきばらをかかえて、とぼとぼとあるきつづけました。宿屋やじやにとまることもできません。夜よるになって、さびしいくらい道みちをとおっているときなど、

（わるいやつがでてこなければよいが。）

と、おもわず、刀のつかをにぎっていることもありました。足をひきずりながら、やつとの思いで大阪の兄さんのところにたどりついたのは、夜の十時すぎでした。

兄さんは、たいへんおどろきました。が、くわしいわけをきくと、

「そうだったのか、よくわかった。だが、長崎からここにくるには、中津によつてくるのが道のじゆんというものだ。それを、おまえはお母さんのおられる中津をよけてきた。

まあ、わたしがここにいなければともかく、おまえとここで顔をあわせながら、このまま江戸へいかせたとあつては、まるで兄弟がぐるになつてやつたようで、お母さんにもうしわけないではないか。お母さんは、それほどにはおもわれないかもしれないが、どうしてもわたしの気がすまない。江戸へいかなくとも、大阪にだつて、よい先生が、そういうものだ。そのことをかんがえてみてくれ。が、今夜は、おまえはつかれているだろうから、ゆつくりやすんだらよからう。」

と、やさしくいたわつてくれました。

諭吉は、かぞえ年で三つのに、中津へかえり、こんど十八、九年ぶりで、大阪へきたのですが、くらしきのまわりには、まだ諭吉のことをおぼえているものがたくさんありました。ですから、あくる日になると、諭吉がきたことをしつて、これらの人々が

あつまつてきました。

「おお、ほんとに大きくなりました。やつぱり、あかちゃんのおもかげが、どこかにのこつていますね。」

などといって、なみだをながさんばかりに、よろこんでくれる人もいました。諭吉のおもりをしてくれた武八じいさんは、自分のまごがきたようなよろこびかたで、堂島のあたりをあるきながら、

「のう、わかぼつちやま。おまえさまのお生まれなすつたとき、このわしは夜中に、あの横町のさんばさんのところへむかえにいったもんです。そのさんばさんは、いまもた

つしやにしておるようです。それから、よくおまえさまをだいて、毎日毎日、すもうのけいこ場をのぞきにいったものですが、あれがそうです。」

と、ゆびさしておしえてくれました。それをきいていると、諭吉は、むねがいつぱいになつて、おもわずなみだをこぼしました。

こんなわけで、諭吉は、自分が旅にある身とはおもえず、ほんとうに、ふるさとかえつたような気持ちがありました。

そこで、兄さんのすすめもあることだし、大阪で勉強することにし、緒方洪庵

という先生の塾にはいることになりました。

塾は「適塾」といい、船場の過書町（いまの東区北浜三丁目）にありました。緒方先生はすぐれた町医者で、オランダ語とオランダ医学をおしえていて、おぜいの書生がいました。

諭吉が適塾にはいったのは、安政二（一八五五）年三月のことでした。先生は諭吉にむかって、

「いままで、どんな勉強をしてこられたのかね。」
とたずねました。

「はい、きまった先生はごいけません。長崎で、いろいろな先生からならいました。」

「では、これをよんでごらん。」

先生がさしだした本を、諭吉はしばらくみていましたが、やがてよみはじめました。

これまでに勉強強したことをおもいだしながら、日本語にほんやくしていききました。

「ほほう。本場の長崎で勉強強しただけあって、きみは、よみかたがうまい。」

とほめてくれたので、諭吉がおもわずにつこりしますと、

「だが、どうも、きみは正式な勉強強べんきやうをしてないようだね。土台どだいがしっかりしてない。外国語がいこくごのいみをただしくみとるには、文法ぶんぽう、つまりことばのきまり、やくそくだね、それをよくしつていなければいけない。文法ぶんぽうは文章ぶんしょうの土台どだいだ。きみは、文法ぶんぽうを、あたらしく第一歩だいいほからやりなおすひつようがあるね。」

といわれ、がっかりしてしまいました。

けれども、そのまま、へこたれてしまうような諭吉ゆきちではありません。

「ようし、はじめからやりなおしだ。」

もちまえの負けじだましいをだして、がんばりましたから、諭吉ゆきちの勉強強べんきやうはどんどんすすんでいきました。兄にいさんはいつも、そばではげましてくれたり、いろいろと力ちからになってくれました。

ところが、つぎの年としの正月しょうがつごろから、兄にいさんがリユーマチという病びょうき気をわずらつて、右手みぎての自由じゆうがきかなくなりました。

そのうちに、こんどは諭吉ゆきちが腸チフスちようちふすにかかりました。それは、適塾てきじゆくの兄あにである岸きしという人ひとが、腸チフスちようちふすにかかったのをかんびようしていて、うつったのでした。たいへんおもくて、これでもう死しんでしまうのではないかとおもわれる日ひが、いく日にちもつづき

ました。

緒方先生は、ひじょうに心配して、いろいろとめんどうをみてくれました。そのおかげで、四月ごろには外にでてあるくことができるようになりました。兄さんも、だいぶんよくなりました。

ちようど、そのころ、兄さんの役所のつとめがおわり、中津の町へかえることになったので、諭吉も、なつかしいお母さんのそばで、病後のからだをやしなうことになりました。

兄さんといっしょに船にのってかえたのは、五、六月のことでした。

(もう二どと中津へなんか、かえるものか。)

と、かくごをきめていた諭吉ですが、お母さんのつくつてくださるりょうりをいたでいてると、目にみえてけんこうをとりもどしてきました。兄さんのリユーマチも、いまずぐあぶないというようすもないので、八月にふたたび大阪にもどって、勉強をはじめました。

ところが、秋になってまもない九月十日ごろ、お母さんから、九月三日に兄さんがなくなつたから、すぐかえつてくるようにとの知らせがありました。びっくりした諭吉は、す

ぐさま中津へかえりました。そうしきはおわっていましたが、かわいいあととりむすこをなくしたお母さんと、やさしい兄さんをなくした諭吉とは、手をとりあつて、かなしみあいました。

築城書をこつそりうつす

兄さんがなくなつたので、諭吉は、福沢家のあととりとなり、中津藩の役所に毎日、つとめなければならなくなりました。けれども、心の中では、中津にすることが、いやでいやでたまりません。

ある日、おじさんのところでなんの気なしに、大阪へまたいきたいとはなしますと、「ばかなことをいうな。福沢家のあととりとなつたからには、この中津で、役所の仕事にはげまなければいけない。よそへいつて、おまけに、せけんできらわれているオランダの学問をしたいなんて、とんでもない話だ。」

と、おそろしいけんまくで、しかられてしまいました。

そのころ、中津藩の空気は大の西洋ぎらいでしたから、諭吉の気持ちなどさつして

くれるものがないのも、むりはありません。そこで、諭吉は、お母さんにさんせいしても
らうほかに方法がないとかんがえ、そのゆるしをえるじきをねらっていました。

そうしたある日、諭吉は、長崎からかえつてきた奥平壱岐のところへあいさつにい
きました。壱岐は諭吉を長崎からおいだした人ですが、家老のむすこですから、しらぬ
顔をしてるわけにもいきません。ひさびさのあいさつをかわし、よもやまの話に花をさ
かせているうちに、壱岐は、一さつの原書をとりにだして、

「ときに、どうじゃ。この本は、長崎で手に入れたオランダの築城書（城のつくり
かたの本）だ。めずらしいものじやろうが。なにしろ、わずか二十三両で買ったほりだし
ものだからな。」

と、じまんそうにみせました。

諭吉は、大阪の適塾で、医学や物理の本をみたことはありますが、まだ築城
書を見たことはありません。それに、ペリーがきてからは、日本国じゆうで、海のみ
もりや、陸の城づくりの話で大きわぎをしているときでしたから、諭吉は、いつそうこの
本をよんでみたくまりました。しかし、かせといたところで、かしてくれるはずはあり
ません。でも、うまくおだてたら、ひよつとしたら、という考えがうかんだので、

「いや、これは、まったくすばらしい本ほんです。それを二十三両りやうでお買かいになったなんて、ほんとうにほりだしものです。オランダ語ごの勉べん強きやうがうんとすすまれたから、こういうほりだしものをみつけれたんですね、きつと。わたしなどには、一年ねんや二年ねんでよみとおせるものではございません。けれども、せめて、絵え図ずともくじだけでも、一ひととおりはいけんしたいものですが、いかがでしょう、四、五日にち、かしていただけませんか。」

おもいきつて、こう、きいてみました。すると、壹岐いぎは、ほめられたのが、よほどうれしかったとみえて、

「ああ、いいとも。四、五日にちでよいなら、もつていきなさい。」

といいました。よろこんだ諭吉ゆきちは、壹岐いぎの気持ちきもちがかわらぬうちにと、原書げんしょをだいににかかえて、いそいで家いえにかえつてきました。

さつそく、羽ペンはねと墨ぼくじゆう汁じゆうと紙かみを用意よういして、二百ページあまりの築城書ちくじやうしょを、かたっぱしからうつしはじめました。なにしろ、人ひとにいられてはたいへんなので、家いえのおくにひっこみ、だれにもあわず、昼ひるも夜よるも、力ちからのかぎり、むちゆうになつてうつしました。

このとき諭吉ゆきちは、城しろの門もん番ばんをするつとめがありました。三日みっかに一ひとどは、その番ばんがまわつてきます。その日ひだけは、昼ひるはうつすことができませぬ。しかし、夜よるになると、こつそ

りとはじめて、朝、城の門があくまでうつしました。顔ははれぼったくなり、病人のようにみえました。

横文字をうつすこともたいへんですが、もしも、このことが壹岐にわかったら、ただ原書をとりかえされるだけではすまないかもしれません。いろいろとむずかしいことになるだろうとおもうと、その心配はひとりでありません。

(まるで、どろぼうをしているようなものだ。)

と、壹岐にたいして、わるいとおもいましたが、

(でも、壹岐はわるだくみで、自分を長崎からおいだしたんだから、まあ、これで、いいこというものだ。)

と、自分で自分のやっていることをいいわけしてなぐさめ、とうとう、二十日ばかりでうつしおえました。

「せっかくおかしいただいたのですが、もくじをみても、ちんぷんかんぷんで、なにが書いてあるのか、よくわかりませんでした。それで、つい、おそくなつてしまいました。」

諭吉が、こういつてかえしますと、壹岐は、かえつて、うれしそうな顔つきをしました。これで、壹岐には、なにもしられずにすみ、諭吉はほっとしました。

とうじに、諭吉は、このぬすみうつした築城書をよんでみたくなりました。それには、大阪へ行って、みっちり勉強しなければなりません。けれども、年とつたお母さんが、どんなにさびしがらうとおもうと、諭吉の心はまよいました。でも、おもいきって諭吉がはなしますと、お母さんは、気持ちよくゆるしてくださいました。

大阪へいくとなると、あとのしまつをしておかなければなりません。兄さんの病氣などで、借金がだいぶありました。そこで、家のどうぐなどを売りはらって、それをかえしてしまいました。

しかし、諭吉は、これまでとはちがつて、福沢家のあととりとなつたのですから、藩のゆるしがなければ、中津から一步も外へでることができません。蘭学の勉強にきたいというねがいをだしました。すると、したくしているかかりの人が、

「蘭学しゆぎようというのは、さきにれないがないし、ぐあいがわるい。砲術しゆぎようにいきたいというねがいにしたほうがよい。」

と注意してくれました。

「しかし、緒方洪庵先生といえ、大阪でもゆうめいな医者ですよ。その医者のごころへ砲術しゆぎようにいくというのは、おかしいではありませんか。」

諭吉ゆきちがたずねますと、

「いや、そうしたほうがよい。そうでないと、なかなかゆるしがでないから。」
というのでした。

かたちやていさいだけにこだわる役所やくしよのやりかたをばかばかしくおもいましたが、とにかく、そういうねがいにかきかえてだしますと、かかりの人ひとがいったとおり、ゆるしがでました。

ほこりたかきばんカラ書生しよせい

大阪おおさかへふたたびやってきた諭吉ゆきちは、すぐ緒方先生おがたせんせいのところへいきました。二か月げつぶりにあった先生せんせいに、諭吉ゆきちは、中津なかつであったいろいろなことをほうこくし、かりた原書げんしよをうつしてしまったこともはなしました。

「そうか。それは、ちよつとのあいだに、けしからぬことをしたような、また、よいことをしたようなものじやな。はっはっは。」
とわらいながら、ことばをつづけて、

「ところで、いまの話で、おまえには、どうしても学資（勉強するためのお金）がないことがわかったから、わたしがせわをしてやりたい。しかし、ほかにも書生がいることだし、おまえ一人にえこひいきするようにみられては、おたがいによくない。どうだろうな、その、おまえがうつしたという築城書は、おもしろそうだから、それをおまえにほんやくしてもらおうということにしては……。うん、それがよい。そうしなさい。」と、しんせつにいつてくれました。

諭吉は、よろこんで、その日から、適塾にねとまりして、勉強することになりました。ここには、日本じゅうのあちこちから、西洋医学の勉強をこころぎず青年や、諭吉のように、医学ではなく、ただ蘭学をまなびたいという青年たちが、八、九十人もあつまつてきておりました。塾にねとまりしているものもおおぜいいました。この塾では、はじめて入学したものには、上級生が、ガランマチカ（文法）をおしえ、やさしい文のよみかたとやくしかたをおしえました。これがすむと、セインタキス（文章法）をおしえ、すこしむずかしい文をならわせます。この二つがわかるようになると、あとは、自分で勉強をすすめていくのです。

勉強のていどによつて、クラスが七つか八つにわかれていて、クラスごとに五人と

か十人とかがあつまつて、一人ずつじゆんばんに原書をよんで、日本語にやくします。これを会読といいます、わからないところがあつても、だれにもきくことはできません。ただ、ドクトル・ズーフというオランダ人のつくつた、大きな「ハルマ」という字引をひいて、自分でかんがえるのでした。

原書といつても、塾にあるのは、物理学と医学の本だけで、一つのしゆるいのもは一さつずつしかなく、ぜんぶで十さつばかりでした。そこで、おおぜいの生徒が勉強するには、くじで、じゆんばんをきめて、めいめいに原書を半紙に四、五まいぐら

いうつしとるわけでした。それに字引は一さつしかありませんから、たいへんでした。

会読は、毎月きまつた日に六回ぐらいおこなわれました。よくできた人には白まる、できなかつた人には黒まる、わりあてられた文章がぜんぶできたものには、白三角のしるしをつけます。これで三か月つづけて白三角をもらった人は、一つ上のクラスにすすむことがゆるされました。ですから、ふだんは兄弟のようになかのよい生徒たちも、このときばかりは、はげしいきようそうになりました。

諭吉は、まえに勉強強していたので、こんどは中級のクラスにはいりました。夕食をすますと、すぐ一ねむりして、夜の十時ごろに目をさまし、それからずっと本を

よみます。明けがた、台所のほうで朝食のしたくのはじまる音をきくと、もう一どねむり、朝食ができてあがるころにおきて、すぐ朝ぶろにいき、かえって朝食をすますと、また本をよむといったあたりさまでした。

そのため、せいせきはぐんぐんあがって、とうとう、塾にある本をぜんぶよんでしまい、力もついてきました。こうして、三年たつうちに、諭吉は、先生からみとめられて、塾長になりました。

けれども、諭吉は勉強の虫になつたわけではありません。おおいに勉強するとともに、かなりないたずらもやつてのけ、おおいにあそんだのです。

新入生は、緒方先生に入門料をおさめますが、そのとき塾長の諭吉にも、いくらかのお礼をもつてきます。月に新入生が四、五人もあれば、ちよつとした金額になります。これでなかまをさそつて牛肉屋へいって、牛なべをつつきながら、酒をのみました。そのころ牛なべをつつくのは、品のわるいものがやることで、いれずみをした町のごろつきと、適塾の書生とにかぎられていました。諭吉は、子どものときからの酒ずきだったものですから、ずいぶんお酒をのみました。

こづかいがなくなると、ズーフの字引をうつします。あちこちの藩から、字引をうつし

てくれという注文ちゆうもんがありますので、そのうつし代だいをかせぐわけです。それでも、こづかいにこまって、しかも、酒さけがのみたいというときには、こんなこともやりました。

道修町どしやうちのくすり屋やにくまがとどいて、そのくすり屋やの主人しゆじんが、適塾てきじゆくの書生しよせいさんに、かいぼうをしてみせてもらいたいと、たのんできました。それはおもしろいというので、諭吉ゆきちは医者いしやしぼうではないからいきませんでした。塾じゆくから七、八人にんがそろつてでかけていって、かいぼうにとりかかり、これがしんぞうで、これが肺はい、これがかんぞうだとせつめいしてやると、

「まことに、ありがとうございました。」

といつて、くすり屋やの主人しゆじんは、さつきとかえつてしまいました。これは、適塾てきじゆくの書生しよせいにかいぼうしてもらえば、くすりにするくまのきもが、うまくとれるとかんがえてし

くんだものですから、くまのきもさえとれば、用事ようじがすんだわけでした。塾じゆくの書生しよせいたちには、このことがわかつていますから、おさまりません。諭吉ゆきちが中ちゆうし心しんとなつて、くすり屋やにかけあう手紙てがみをかき、使者ししやにいくのはだれ、おどかすのはだれ、と、それぞれの役やくをきめて、かけあいに行きました。くすり屋やの主人しゆじんも、これにはこま

つたとみえて、ひらあやまりにあやまり、酒さけを五ごしように、にわとりときかななどをお礼れい

としてだしました。

「これはしめた。」

とばかり、その夜、諭吉たちがおいにのんだのは、いうまでもありません。

ところが、この酒のみのことで、諭吉は大しっぱいをやりました。夏の夜のことでした。大阪の夏はあついで、諭吉たちは、まるはだかであることにしていました。諭吉が二かいの部屋にねていますと、下から女の人の声で、

「福沢さん、福沢さん。」

とよびます。諭吉は夕がた酒をのんで、いまねたばかりです。

「うるさいなあ。いまごろ、なんの用があるのか。」

と、むつとして、まるはだかのままとびおきて、はしごだんをおりて、

「なんの用だ。」

と、ふんぞりかえつたところ、なんと、緒方先生のおくさんではありませんか。にげようにもにげられず、諭吉は酒のよいがいつぺんにさめてしまいました。おくさんも、きどくにおもったのか、なにもいわず、おくのほうにひっこんでしまわれました。

諭吉は、そこではんせいをしました。

(酒をのんでいたから、こんなしつぱいをしたのだ。よしつ、酒をやめてしまおう。)

それから、ぷつぷりと酒をやめました。なかまのものは、びっくりしました。中には、

「なあに、三日ぼうずで、すぐにのみだすにちがいない。」

と、ひやかし半分にみているものもありましたが、十日たち、十五日たつても、酒をの

みません。

高橋という親友が、

「きみのしんぼうはたいしたものだ。みあげてやるぞ。しかし、人間というものは、た

とえわるいならわしでも、きゆうにやめることはよくない。きみが、いよいよ酒をのまぬ

ことに決心したのなら、そのかわりにたばこをはじめたらどうか。人間には、なにか

一つぐらいたのしみがなくはないけなぞ。」

と、しんせつらしくいつてくれました。

諭吉は、たばこはだいきらいで、これぐらい、なんのたしにもならぬものはないと、さ

んざんにわる口をいつていたのですが、高橋のいうことも一つのりくつだとおもい、た

ばこをはじめました。はじめのうちは、からくてくなくて、いやでしたが、だんだんにな

れていき、一か月もたつうちには、たばこのみになってしまいました。

いつぼう、酒さけのほうもわすれることができせん。いけないとはしりながら、ちよいと一ぱいやつてみました。すると、もう一ぱいのみたくなります。けつきよく、酒さけはまたのむようになり、たばこものむようになつてしまいました。

諭吉ゆきちたちのやることは、せけんの人々ひとびとからみると、いたずらとしかみえませんが、じつは研けん究きゆうねっしんのせいでした。諭吉ゆきちたちは、いつも原書げんしょと首くびつびきでじつけんにはげみました。

あるとき、ろしや（塩化アンモニウムのべつなの名）をつくつてみることになりました。それにはまず、アンモニアをつくらなければなりません。アンモニアはほねからとりますが、ほねのかわりに、うまのつめのけずりくずを、たくさんもらつてきて、とつくりの中なかに入れ、外そとがわに土つちをぬりました。

また、すやきの大きなかめを買かつてきて、しちりんのかわりにし、火ひをどんどんおこして、その中なかへ、とつくりを三本さんぽんも四本よんぽんも入れて、うちわでバタバタあおぎました。すると、とつくりの口くちにつけたくだのさきから、たらたらと液えきがながれてきました。これがアンモニアですが、そのくさいこと、くさいこと、塾じゆくのせまい庭にわでやっているのですから、たまりません。

緒方先生おがたせんせいのうちのほうでも、気持ちきもちがわるくなつて、ごはんもたべられない、ともんくがでました。いやなにおいが着物きものにしみこんでしまつて、夕ゆづがた、ふろ屋やにいくと、着物ものばかりか、からだにまでくさいにおいがしみついていて、みんなからはいやがられるし、いぬさえもほえついてきました。

「このごろ、適塾てきじゆくの書生しよせいさんたちは、酒さけどつくりをちつともかえしてくれないが、どうしてだろう。」

酒屋さかやのおやじさんが、こつそりさぐらせると、なにかひどくくさいにおいのするものじつけんにつかっているというのです。

酒屋さかやはその後ご、なんといつても酒さけをもつてこなくなりました。これには、みんなこまりました。

このときのじつけんでは、アンモニア水すいをつくれたものの、かたまらず、かんぜんろしやになりませんでしたし、あまりくさいので、いったんうちきることにしました。しかし、せつかくできかかったものをやめてしまうのは、学者がくしやのふめいよだというので、二、三人にんのものは、淀川よどがわに船ふねをうかべて、じつけんをつづけました。

ところが、風かぜむきによつて、そのくさいにおいが、川かわから町まちのほうへながれていくので、

またそこからもんくができました。それで、川上のほうへのぼったり、川下のほうへく
 だったりしながら、研究をつづけるといふありさまでした。

このように、適塾の書生たちは、ときにしつぱいしたり、ときには、せけんの人
 とびと々からしかられるようなこともしましたが、どれもこれも、青年らしい、あたらしい
 ことをしりたいという、はげしい気持ちのあらわれでした。自分たちだけが、西洋のす
 すんだ学問にせつしているのだというほこりが、みんなの心の中にありました。そうし
 て、本をよむだけでなく、じつさいに自分でやってみて、あたらしい知識を身につけ、世
 の中に役だつ学問をすすめようと、勉強にうちこんでいるのでした。

こうした適塾の生徒の中から、わかい革命家の橋本左内、軍人・政治家の村
 田蔵六（のちの大村益次郎）、医療の制度をあらためた長与専齋、日本赤十
 字社をつくった佐野常民など、のちに幕末から明治にかけてかつやくした人たちがで
 ました。

むろん、諭吉も、その中の一人でした。勉強をすればするほど、諭吉は西洋の学
 問のすすんでいることがわかり、日本も、おそかれはやかれ、これをもっとねっしん
 にとり入れなければならぬ日があるにちがいない、とかんがえるようになってきました。

3 西洋の旅みやげ

オランダ語の先生となつたが

適塾でねっしんに勉強している諭吉のもとへ、とつぜん、江戸の中津藩奥平家のやしきから、使いのものがやつてきました。それは安政五（一八五八）年の秋の日のことで、諭吉は二十五さいになっていました。こんど蘭学の塾をひらくことになつたから、その先生になつてほしいといふのです。これは藩のめいれいですから、諭吉はしようちして、いよいよ江戸へいくことになりました。

諭吉は、べつにけらいなどいませんが、藩からけらい一人ぶんの旅費がでましたので、塾のなかまに、だれか江戸へいきたいものはないかといひますと、岡本周吉と原田磊蔵という友人が、いっしょにつれていってくれともうしましたので、三人で東海道をあるいて、江戸へむかいました。江戸についたのは、十月もおわりごろで、もう、すこしうすらすむいきせつでした。

こびきちようしおどめ
木挽町汐留（いまの新橋のふきん）にある奥平やしきにいきますと、鉄砲
洲（築地）にある中やしきの長屋をかしてくるということでした。諭吉は岡本と二
人でそこにすんで、塾をひらくことになりました。

もう一人、いつしよにきた原田は、下谷の大槻というお医者のところへいききました。

諭吉のところへは、そのうちに、オランダ語をならいに、生徒がぼつぼつやってきはじ
めました。中津藩の子どもばかりでなく、ほかからも入門するものがあつて、十人
あまりの生徒に、諭吉は、毎日オランダ語をおしえていました。

ところで、この長屋は、そのときから八十八年まえの明和八（一七七二）年に、前野
良沢や杉田玄白たちが、オランダのかいぼう学（生物のからだをきりひらいて研
究する学問）の本を、くしんしてやくした場所なのでした。それは「解体新書」
といつて、日本のあたらしい医学にたいへん役だちました。

そのことをきいた諭吉は、ふかいかんげきをおぼえ、
「よしつ、この塾を、江戸でいちばんりっぱな蘭学塾にしてみせるぞ。」
とはりきりました。

それにつけても、江戸の蘭学者たちの力はどれほどのものであろうか、それをしつて

おきたいとおもいました。

ある日、島村鼎甫しまむらていほという蘭学者らんがくしやをたずねてみました。島村しまむらはやはり緒方先生おがたせんせいのところでもなんだことのある医者いしやで、江戸えどにきて、オランダの本ほんのほんやくなどをしていのでした。ですから、二人ふたりはすぐしたしくなりましたが、このとき、島村しまむらは、生理せいりが学く（生物せいぶつのからだのはたらきを研究けんきゆうする学問がくもん）の原書げんしよをほんやくしていると

ころで、その本ほんをもつてきて、
「ここところが、どうもわからなくてよわっていたところだ。きみ、ひとつ、やってみてくれないか。」

といいました。諭吉ゆきちがよんでみますと、なるほどやくしくいところでした。

「ほかの人ひとにも、そうだんしてみましたか。」

「ええ、もう、友ともだち五、六人にんにはなしてみたんだが、どうしてもわからないというんだ。」

そこで諭吉ゆきちは、三十分ぶんばかりかんがえているうちに、ちゃんとわかってきたので、島しまむら村むらにせつめいしてやりますと、

「なるほど、そうか。やはり、大阪おおさかじこみはたいしたものだ。」

と、諭吉ゆきちの力ちからをほめてくれました。これで、蘭学らんがくは大坂おおさかのほうがすすんでいたことがわかり、諭吉ゆきちは、心こころの中なかでほつとあんしんしました。

それからのも、諭吉ゆきちは、原書げんしよの中なかから、むずかしい文ぶん章しょうをひっぱりだして、

「ここは、むずかしくてわかりませんが、どうやくしたらよいでしょうか。」

ともちかけて、いろいろな学がく者しゃたちの力ちからを、それとなくためてみましたが、あまりすぐれた人ひとはみあたりませんでした。

ですから、諭吉ゆきちが、やがて江戸えど一番ばんのひょうばんをとるようになったのも、あたりまえのことといわなければなりません。諭吉ゆきちはまことによい気き持もちでした。てんぐにさえなっていました。ところが、諭吉ゆきちのそのてんぐの鼻はなをへしおるような、たいへんなことがおこったのです。

さあ、こんどは英語えいごの勉べん強きやうだ

嘉永六かえい（一八五三）年ねんの六月がつに、アメリカからペリーがやってきて、開国かいこくをせまったことは、まえにかいておきましたが——幕府ばくふは、一年ねんのちに神奈川かながわ（いまの横浜よこはま）で、

アメリカとのあいだに和親条約（おたがいになかよくしようというとりきめ）をむすびました。ところが、それだけでは、日本をほんとうに開国させたという事にならないので、アメリカは、ぜひ、修好通商条約（商売のとりきめ）をむすぼうとかんがえるようになりました。そのため安政三（一八五六）年に、ハリスがアメリカの総領事として、伊豆の下田（静岡県）へやってきて、幕府とこうしようしました。けれども、日本の中では、外国人をおいはらえといううんどうがさかんになり、幕府としては、これをおさえる力がなく、なかなかはつきりしたたいどがきまりません。京都の朝廷（天皇がた）も、修好通商条約をむすぶことにはほんたいでした。いつぼう、ハリスからのさいそくはつよくなりました。そこで、大老の井伊直弼は、自分だけの考えで、この条約にはんをおしてしまいました。その日は、諭吉が江戸へでてくる四か月ほどまえの、安政五（一八五八）年六月十九日のことでした。

つづいて、オランダ・ロシア・イギリス・フランスの四か国とも条約をむすび、すでに日米和親条約で開港されていた下田・箱館（函館）にくわえて、ちかいらい、神奈川（横浜）・長崎・新潟・兵庫（神戸）のみなどをひらくことが

きめられました。

よく年ねんには、横よこ浜はまに外国がいこくじん人がやってきて、ぼうえきをすることがゆるされました。これまでは、小ちいさな漁ぎよそん村むらだったので、きゆうにいきいきとした町まちになりました。このあたらしくひらけた横よこ浜はまを、諭吉ゆきちはぜひみておきたいとおもいました。

そこで諭吉ゆきちは、ま夜中よなかの十二時じふにじごろに江戸えどをでて、夜よるの東海とうかい道どうをあるいて、夜明よあけごろに横よこ浜はまにつきました。さつそく海岸かいがんのほうへいつてみました。けれども、みなととしてひらけたばかりなので、まだ外国がいこくじん人のすがたもすくなくて、きゆうごしらえのそまつな西洋せいようかん館かんが、ぼつぼつたてられ、店みせがいくつかならんでいるだけでした。

それらの店みせを、諭吉ゆきちはめずらしそうに、きよろきよるとみまわしながら、あるいているうちに、

「はてな。」

と、首くびをひねりました。どの店みせのかんばんをながめても、店みせさきにならないでいるしなものをみても、かいてあることばが、さつぱりよめないではありませんか。外国がいこくじん人じんどうしがはなしていることばも、諭吉ゆきちのとくいなオランダ語ごとはちがっているようで、なにがなやら、すこしおもしろい感じがわかりません。

さんざんあるきまわつたすえ、ある一けんみせの店によつて、オランダ語ではなしかけてみました。すると、店みせの主人しゅじんはドイツ人じんでしたが、さいわい、オランダ語ごのわかる人ひとでした。

諭吉ゆきちの発音はつおんがわるいので、うまくつうじませんが、紙かみにかけばわかるというので、諭吉ゆきちがかいてみせますと、

「おお、あなたは、オランダ語ご、なかなかうまいことあるね。でも、ここでは、まったく役にたたない。英語えいごでなければだめ。みんな、英語えいごしゃべっている。かんばんも、なにもかも英語えいごばかりね。」

と、店みせの主人しゅじんからいわれました。

「そうか、英語えいごでなければだめか。」

と、諭吉ゆきちはかんがえこんでしまいました。

店みせの主人しゅじんがすすめたオランダ語ごと英語えいごとの会話かいわの本ほんなど、二、三さんつを買かうと、諭吉ゆきちは、おもい足をあしひきずつて、江戸えどへかえつてきました。

ちようど夜中よなかの十二時じちかくでしたから、まるまる二十四時間じかん、諭吉ゆきちはあるいていただけで、へとへとにつかれきつていました。けれども、それは、あるきつかれたからだけで

はありません。五、六年もかかって、いっしょうけんめい勉強したオランダ語が、なの役にもたたないことを、じつさいにして、がっかりさせられたからでした。

「なんと**い**うばかなことをしたものだ。」

と、諭吉はなきたいくらいでしたが、

「でも、くよくよしていてもはじまらぬ。よし、こんどは英語の勉強をするんだ。」

諭吉は、そのつぎの日から、英語の勉強にとりかかりました。

とはいっても、いったい、どこで、だれに英語をおそわつたらいいのか、さつぱりけんとうがつきません。そのころの江戸には、英語をおしえてくれる先生など、一人もいませんでした。でも諭吉は、あきらめないで、あちこちたずねているうちに、耳よりな話をききました。それは、長崎でつうやくをしている森山多吉郎という人が、いま江戸にきて、幕府の**ご**用をつとめているが、英語ができるといううわさをきいたのです。

諭吉はたいへんよろこんで、さつそく、森山をたずねていきました。森山は、諭吉のねっしんなたの**み**をきいてはくれましたが、幕府の**し**事がいそがしくて、おしえてくれる時間がなかなかありません。

「それでは、まあ、せつかくなりたいということですから、毎日、朝はやくおいでく

ださい。役所へでかけるまえに、おしえてあげましょう。」
 といつてくれました。

そこで、諭吉は、朝はやくおきて、鉄砲洲から森山先生のすんでいる小石川まで、八キロメートルあまりを、てくてくとあるいてかよいはじめました。ところが、森山先生の家についてみると、

「きようはおきやくがきているから。」とか、

「もうすぐ役所へでかけなければならぬから。」

といつてことわられ、毎朝のように、むだ足をふみつづけました。それでも、諭吉は、こんきよくかよいました。森山先生はこれをみて、きのどくにおもい、

「どうも朝はだめだから、あすからは、ばんにきてみてください。」
 といいました。

それで諭吉は、こんどは夕がたにかよいはじめましたが、森山先生は、あいかわらずいそがしくて、おしえてくれるひまがありません。およそ三か月ほどかよいましたが、とうとう、なにもおしえてもらえませんでした。おまけに、森山先生も、それほど英語ができるわけでもないことがわかりましたから、諭吉は、森山先生からおそわるこ

とをあきらめてしまいました。

それからは、小さい字引を手に入れて、自分一人で英語の勉強に力をそそぎました。けれども、おもうようにはすすみません。

(これは、一人ではだめだ。おなじようなやみをもっている友だちをみつけて、いっしょに勉強すれば、きつとすすむにちがいない。)

こうおもった諭吉は、友だちの神田孝平にあつてはなしてみますと、

「じつは、わたしもやってみたのだが、さっぱりわからない。もう、こりごりだ。まあ、きみは、いつでも元気がいいから、おおいにやってみることだね。」

と、あいてになつてくれません。

そこで、こんどは、村田蔵六(のちの大村益次郎)にすすめてみました。すると、

「なにも、そんなくろうをすることないじゃないか。やめたほうがよい。ひつような本なら、オランダ人がほんやくするから、それをよめばよいじゃないか。」

といわれてしまいました。

これではしかたがないので、三番めに原田敬策のところへいってはなしてみますと、「そうか、それはおもしろい。ぜひやろう。二人ならば気がつよい。どんなことがあつて

も、やりとげようじやないか。」

と、さんせいしてくれました。

こうして、なかまをみつけることのできた諭吉は、それからというものは、すこしでも英語を^{えいご}しっている人が^{ひと}あれば、すぐにたずねていつて、おしえてもらおうといったありさまでした。

だんだん^{べんきよう}勉強^{べんきよう}をしていくうちに、英語^{えいご}がオランダ語^ごにかなりになっていることがわかってきました。そうして、英語^{えいご}の力^{ちから}がめきめきとすすんでいきました。

アメリカの旅^{たび} ヨーロッパの旅^{たび}

「このたび、アメリカへいかれるそうですが、わたしを^せひつれていってください。」
と、諭吉^{ゆきち}はつてをもとめて、はじめてあつた幕府^{ぼくふ}の軍艦^{ぐんかん}奉行^{ぶぎよう}木村^{きむら}摂津^{せつ}守喜^{しゆき}毅^いに、しんけん^{しんけん}にたのみこんでいました。それは、安政^{あんせい}六^む(一八五九)年^{ねん}の冬^{ふゆ}のある日^ひのことでした。うん、うんと諭吉^{ゆきち}のことばをきいていた木村^{きむら}は、

「よろしい。それほどのぞまれるのなら、つれていつてあげよう。」

と、その場でしようちしてくれました。

じつは、幕府は、まえにとりきめたやくそくにしたがって、条約書をとりにかわすために、アメリカへ新見豊前守・村垣淡路守・小栗豊後守の三人を使節として、おくることになりました。この使節たちは、アメリカからむかえにきた船、ポーハタン号にのつて太平洋をわたるわけですが、それといっしょに、幕府は、日本の軍艦咸臨丸をアメリカへいかせることにしました。それにのりこむのは、軍艦奉行の木村撰津守喜毅です。

軍艦というからには、たいそう大きな船のようにきこえますが、わずか二百五十トンで、みなとの出はいりだけにしようきをたき、あとはただ、風をたよりにすすんでいかなければならない、ちつぽけな船でした。

乗組員は艦長（海舟）の勝麟太郎（海舟）ら九十六人、ほかに日本の近海を測量（りくみいん）にきて、なんぼしたアメリカの海軍士官ブルック大尉（かいぐんしかん）ら十人がのりました。

咸臨丸は、万延元（まんえんげん）（一八六〇）年一月十九日、使節たちをのせた船よりも一足さきに浦賀を船出しました。

冬のことですから、北風がつよく、くる日もくる日も、あらしにおそわれました。船

は木の葉のようにゆれ、たかい波はかんぱんにおどりあがり、うつかりしていると、人間もころがされるしまつで、みんな青い顔をしていました。けれども、日本人が自分たちの軍艦で、はじめて太平洋をわたるのだというほこりがあるので、みんな力をあわせて、あらしとたたかいました。こうして、日本暦で二月二十六日に、ぶじにサンフランシスコにつきました。

サンフランシスコの人々は、たいへんなかんげいぶりをみせました。ちよんまげに、はおりはかまをつけ、こしに刀をさした日本人のかつこうが、ものめずらしかつたせいもありましようが、ちつぽけな船で太平洋のあら波とたたかってきたということに、よろいよく感動したのにちがいありません。馬車にのせて、りつぱなホテルにあんないし、町のおもだった人々が、あとからあとからとおしかけて、下にもおかないもてなしぶりでした。あらしにもまれてこわれた咸臨丸も、ただでなおしてくれました。

諭吉は、西洋の本をたくさんよんでいたので、だいたいのようすはしっていたのですが、じつさいに目でみるのははじめてです。そうして、百聞は一見にしかず、ということわざのとおりだと、つくづくかんじました。

日本ではとても高価なじゆうたんが、部屋いっぱいにしきつめてあって、アメリカ人

がその上うへをくつのまま、へいきであるいているのにもおどろきましたが、どの家いえにもガス灯とうがついていて、夜も昼よるひるのようにあかるいのを、うらやましくおもいました。また、いろいろのあつまりで、アメリカ人が、男おとこと女おんなと手てをくんでダンスをやるのをみて、びつくりしました。

諭吉ゆきちは、電信でんしんや、めつき工場こうじょう、さとうの製造所せいぞうじょなどもみてまわりましたが、みな本ほんでよんでいることばかりなので、そのしくみにはさほどおどろきませんでした。

わからないのは、政治せいじや社会しゃかいのしくみでした。ある日ひ、諭吉ゆきちはたずねてみました。「ワシントンの子孫しそんのかたは、いまどうしていますか。」

「さあ、どうしていますかねえ。ワシントンにはたしか、むすめがいたはずですから、だれかのおくさんになつてゐるんでしようね。」

このへんじには、おどろいてしまいました。

アメリカの初代しよだい大統領だいとうりやうのジョージ・ワシントンといえば、日本にっぽんでは鎌倉幕府かまくらばくふをひらいた源頼朝みなもとこのよりとむか、江戸幕府えどばくふをひらいた徳川家康とくがわいえやすとおなじようなものです。徳川家とくがわのものがずつと将軍しょうぐんをついでいる日本にっぽんとくらべて、なんというちがいでしよう。

もちろん、諭吉はアメリカが共和国で、大統領が四年ごとの選挙でかわることはしていました。が、じつさいにアメリカ人からきいて、なんともふしぎな気がしました。

諭吉は、いっしょにいった中浜万次郎とはなしあつて、ウェブスターの辞書を一さつずつ買いました。これが日本にウェブスターの辞書がはいったはじめです。

中浜万次郎は、ジョン・マンともいい、土佐（高知県）のりょうしでした。あらしにあつてひょうりゆうしているところを、アメリカの捕鯨船にすくわれ、アメリカで勉強して運よく日本にかえり、幕府につかえ、つうやくとしてのりくんでいたのです。

すこしおくれて、サンフランシスコについた条約とりかわしの使節たちが、ワシントンへいくのとはんたいに、諭吉たち咸臨丸の一行は、日本へひきかえすことになり、五十日あまりをすごしたサンフランシスコをあとにして、とちゅうハワイによつてから、日本へもどりました。なつかしい日本にかえりついたので、もう木々のわか芽が、みどりの葉にかわる五月のはじめのことでした。

諭吉がいなかつたわずかのあいだに、日本のようすはともかわっていました。京都の朝廷と江戸幕府とのあらしいがはげしくなり、国をひらくことにさんせいの人

と、外国人をおいはらえという人たちのあいだには、いまにもたたかいがおこりそうな、ふあんな空気がただよっていました。そうして、この年の三月三日には、桜田門外で、水戸の浪士（主人をもたないさむらい）が、幕府が開国したことをおこつて、そのせきにん者である大老の井伊直弼をおそうというじけんまでありました。

しかし、アメリカのりっぱな文明を自分の目でみてきた諭吉は、これを日本にとり入れなければならぬとおもいました。

そこで、諭吉は、鉄砲洲の塾にもどると、もうオランダ語をおしえることはやめて、英語ばかりおしえることにしました。しかし、英語をおしえるといっても、諭吉は、字引をたよりに、一人で勉強したわけですから、英語を自由によみこなすことはできません。ですから、生徒におしえながら、自分もいつしよに勉強するのでした。

そうしているうちに、木村撰津守のせいで、諭吉は、幕府の外国方（いまの外務省のような役所）のほんやくがかりとしてつとめることになりました。それは、外国からさしだしてくる文書を、日本語になおす役でした。おかげで、世界の国々のよすががよくわかりますし、英語の勉強にも役だちました。

この年がくれて、文久元（一八六一）年になると、諭吉は、おなじ中津藩の上

級士族、土岐太郎八の次女錦とけつこんしました。

ところが、その十二月に、諭吉はヨーロッパへいくことになりました。それは、幕府がこんどはヨーロッパ各国へ使節をおくることになり、諭吉はほんやくがかりとして、くわわわわすることをめいぜられたからです。外国奉行の竹内下野守・松平石見守・京極能登守の三人が使節で、その役目は、まえにやくそくしていた江戸・大阪・兵庫（神戸）・新潟でとりひきをはじめのを、すこしのぼしたいという話しあいをするためでした。

使節の一行は、イギリスの軍艦オージン号にのりこみ、品川から出発しました。一行は四十人たらずでしたが、外国では、たべものが不自由だろうというので、白米を何日ぶんも船につみこんだり、宿がぐらくてはこまるとおもい、ろうかにつける金あんどんや、ちようちん・ろうそくまでそろえてもっていききました。まるで、大名が東海道をとおつて、宿屋にとまるときとおなじような用意をしたわけでした。

ところが、パリについてみると、まったくむだなじゆんびをしたことに気がつきました。あんないされたのは、ホテルⅡデⅡローブルという、五かいだての、お城のように大きいホテルでした。部屋が六百、はたらいっている人が五百人もおり、おきやくも千人ぐらいは

とまれるほどの広さでした。部屋には、冬だというのに、あたたかな空気がほかほかこちよくながれ、部屋にもろうかにも、ガス灯がいつぱいついていて、夜もまるで昼のようにあかるいのです。それに、すばらしいごちそうができました。

ですから、せっかく用意してきた金あんどんや、ちようちんなどは、はずかしくてだせません。また、たくさんの白米も、すっかりじやまものになってしまいました。そこで、せわがかりの下役の男に、ただでもらうてもらおうというありさまでした。

シガー（たばこ）とシユガー（さとう）をまちがえて、たばこを買いにやったら、さとうを買ってきたというような、わらい話のようなくじりもありましたが、もつとけつさくもうまれました。

ある夜、諭吉がホテルのろうかをあるいていくと、使節のけらいが、ろうかでしやちこばつて、ぼんぼりをもつて番をしているではありませんか。なにごとかとおもつてよくみると、使節の一人が、大便をしに便所にいったおともでした。便所の二つもあるドアはみなあけはなされ、そのおくでは、いまや一人の使節が、日本流に用をたしているのが、まる見えです。ろうかは、外国の男女がいききしているのですから、はずかしかったらありません。

びつくりした諭吉は、そのおもてにたちふさがつて、ものもいわずにドアをしめ、それから、けらいにわけをはなしてやりました。

こうしたしくじりをやりながら、使節の一行は、フランス・イギリス・オランダ・ドイツ・ロシアの国々をたずねて、やく一年間、ヨーロッパの旅をつづけました。イギリスでは、議会有あつて、政党というものが、おたがいに政治のやりかたや、意見のうえであらそい、せんきよによつて勝つたほうの政党が国の政治をやるしくみになっているときかされましたが、諭吉には、よくのみこめませんでした。

しかし、こんどの旅行ではじめて鉄道にのつて、そのべんりなことがわかり、すべての点で、西洋がすすんでいることをじつさいにしたので、諭吉は、政治のやりかたについても、きようみをもちました。

ロシアでは、医者が病人のしゅじゅつをするところをみせてくれました。諭吉は、だいたんな人間であるくせに、子どものときから、血をみるのがだいきらいだったものですから、医者がメスを入れて、ぱつと血がとびだすのを見ると気持ちが悪くなり、気がとおくなつてしまいました。いっしょにいったものが、諭吉を外につれだし水をのませると、やつと正気にかえりました。

ところが、使節のつとめは、うまくいきませんでした。話しあいやかかけひきが、へただったせいもありましようが、そのころの日本の国内では、外国人をおいはらえというんどうがさかんで、外国人をただむやみにきつたりきずついたりするじけんが、いくつもおこったからです。

そのため、はじめフランスへいったときには、ひじょうによるこんでむかえられたのに、各国をまわって、ふたたびフランスへもどったときには、まるで、にくいかたきにでもあつたように、つめたいあつかいをうけなければなりませんでした。

それは、ちようどこのとき、日本で生麦じけんがおこったという知らせが、フランスへつたえられたからでした。

薩摩（いまの鹿児島県）のどのさまの行列が、江戸をたつて国へかえることになり、東海道の生麦村（いまは横浜市内）をとおつていたとき、横浜にきていたイギリス人がうまにのつてやってきて、ばつたりぶつかつたのです。

そのころ、大名行列といえは、道ばたの家は兩戸をおろし、とおりがかつたものは道をよけて、とおくから土の上にすわつて、とのさまのつたかごをおがまなければならぬほどでした。そんなことをイギリス人はしりませんから、行列をよこぎろうと

したのです。それを、ぶれいものといふので、きりころしてしまいました。

これにたいして、イギリスは幕府にこうぎをしましたが、フランスも、このような日本にほんのやりかたをふんがいたからです。

あぶないせとぎわにたつ日本にっぽん

諭吉ゆきちは、このヨーロッパ旅行りょこうで、日本にっぽんは国くにをひらいて、西洋せいようの文明ぶんめいをとり入れなければならぬという考えかんがをつよめました。そこで、役所やくしよからうけとったお金の太たいぶんで、原書げんしよをたくさん買かつてかえつてきました。

けれども、日本にっぽんではあべこべに、外国人がいこくじんをおいはらえといううんどうがさかんになり、諭吉ゆきちのように、外国がいこくの本ほんをよみ、ヨーロッパがえりの人間にんげんだといえ、いつ、なにをされるかわからない、ぶつそうな世よの中なかになつていました。こういううごきは、まえからあつたのですから、諭吉ゆきちは、べつにこわいとおもつていなかったのですが、友ともだちのいく人にんかが、じつさいにあぶないめにたびたびあつていたので、

(これは気きをつけなければいけない。)

とかんがえなおしました。

そうしたある日、本をよみふけつてゐる諭吉の部屋に、女中があわててはいつてきました。

「みようなおきやくさまがいらつしやいました。」

「どんな人かね。」

「大きなかたで、目はかた目で、ながい刀をさしています。」

「そりや、ぶつそうな人のようだが、名はおたずねしたか。」

「はい、おききましたがお目にかかれればわかるからおつしやつて……。」

どうも、うすきみがわるいとおもつたので、諭吉は、しようじのすきまから、そつとげんかんのほうをのぞいてみました。すると、そこには、緒方先生のところでいつしよに勉強していたことのある原田水山という友だちがたつてゐるではありませんか。ほつとした諭吉は、げんかんへでていつて、おもわず、大きな声で、

「このばかやろう。なぜ、名をいわなかつたんだ。こわい思いをさせやがつて、ひどいやつだ。」

とどなりつけました。

そのあとで、二人は大わらいをしました。が、西洋の学問をしていた人々は、いつも、こんな思いをくりかえしていたのです。まことに、あぶない世の中でした。それとどうじに、日本の国も、ひじようにあぶないせとぎわにたたされていました。

外国人をおいはらえという人々は、ちよつとしたことがあると、すぐ外国人をきりころすようならんぼうをしました。生麦じけんもその一つで、これは尾をひきました。イギリスは、つよい艦隊をおくつて、幕府にたいしてへんじをもとめ、フランスもいっしよになつて、おそろしいたいどで、幕府をせめたてました。

イギリスからの文書を、諭吉はほんやくさせられました。が、イギリスがどんなにうまい決心をもっているかがわかり、どうなることかと心配になりました。いつ、戦争になるかもしれないありさまでした。

けれども、幕府が、イギリスのいいぶんをきき入れて、たくさんのお金をはらったので、さいわい戦争にはなりません。でも、幕府のよわい外交をふんがいた地方の藩では、外国の軍艦にいくさをしかけて、けつきよく、さんざんなめにあわされるよなじけんが、ひきつづいておこりました。

このようなさわがしさの中で、緒方洪庵先生が、急病でなくなりました。それ

は、文久三（一八六三）年六月十日のことでした。緒方先生は幕府のおかかえ医者となつて、大阪から江戸にきて、下谷にすんでいました。諭吉は、二、三日まえに先生をたずね、元氣な先生と、いろいろ話をしてきたばかりでした。そのお通夜には、緒方先生の教えをうけたものが、たくさんあつまつてきました。その中に、村田蔵六（のちの大村益次郎）もいましたので、諭吉が、

「おい、村田くん、いつ、長州（いまの山口県）からかえつてきたんだ。下関では、たいへんなさわぎをおこしたようだな。じつにばかなことをしたもんだよ。あきらかえつた話じやないか。」

とはなしかけますと、村田は、目にかどをたてて、いいました。

「なんだと。外国の軍艦をほうげきしたのがわるいというのか。」

「そうとも。まるできちがいざたじやないか。」

「き、きちがいとはなんだ。けしからんことをいうな。長州では、外国人をおっぱらうことに、藩のほうしんがきまつているんだ。あんな外国のやつらに、わがまをされてたまるものか。外国人はぜんぶおいはらうにかぎるよ。」

と、えらいけんまくです。これでは、まるで話になりません。

諭吉は、村田とはなすことをやめました。そうして、いつしよに西洋の学問をまなんだ村田でさえ、このように外国人をおいはらえというありさまですから、いよいよ、自分のことばやおこないに氣をつけて、このあらしの時代を生きていかなければならないと、かくごをしました。

(国民のみんなが、世界のようすをよくしり、日本が、どんなに文明におくれているかがわかつたならば、きつと、ゆうきをふるいおこして、あたらしく力つよい日本をつくろうと、どりよくするにちがいない。それには、国民が、もつとものしりにならなければならぬ。そうだ、国民を教育しなければだめだ。よし、わたしは、その教育者になろう。さいわい、こんどまた、アメリカへいつてくることになつた。いろいろと見ききしてこよう。)

諭吉は、アメリカに注文した軍艦を、ひきとりにいく幕府の使節の一行にくわわつて、二どめのアメリカの旅にでかけていきました。ときに、慶応三(一八六七)年の正月のことでした。

諭吉は、そのまえに、大小の刀一本ずつをのこして、あとはぜんぶ売りはらつてしまいました。

（これからの世よの中なかは刀かたななんていら
ない。）
とかんがえたからです。

4 明治のもしび

ここまで、たまはとんでこない

「先生せんせいつ、たいへんです。上野うえののほうがくで黒くろいけむりがたちのぼっています。火ひの手ても、ちらちらともえあがりしました。」

かけこんできた生徒せいとの一人ひとりが、いきをはずませてしらせました。それまでしずかだった講堂こうどうが、きゆうにざわめいてきました。

ドカーン、ドドドーン。

はげしい大砲たいほうの音おとが、それにわをかけました。

「あつ、また、大砲たいほうだ。」

と、耳みみに手てをやる生徒せいともあれば、本ほんをおいて、いきなり、外そとへとびだそうとする生徒せいともありました。

このとき、諭吉ゆきちは、生徒せいとたちを講堂こうどうにあつめて、経済学けいざいがくの講義こうぎをしているところで

したが、

「しよくん、おちつきたまえ。ここまで、たまはとんできはせん。」

と、「一こというと、あととはなにごともなかつたように、講義をつづけていました。生徒たちも、それにつりこまれて、いつのまにか、外のさわぎも、大砲の音も気にならず、講義に耳をかたむけていました。そうして、やがて、時間となりました。

「さあ、やねの上にあがって、上野のけむりでもみたまえ。ペンの力は剣の力よりもつよいということ、よくかみしめてね。」

諭吉は、講義をおわって、につこりわらい、講堂からでていきました。生徒たちは、「わつ。」とばかり、かけだしました。

自分の部屋へもどつた諭吉は、たいへんまんぞくそうでした。生徒たちが外の大きさわぎの中で、ねっしんに講義をきいてくれたことが、うれしかったのです。それは、慶応四(一八六八)年の五月十五日のことでした。

この日、上野では、江戸へはいつた官軍と彰義隊とのあいだに戦争があり、そこから八キロメートルばかりはなれた慶応義塾まで、大砲の音がきこえてきました。生徒たちは塾のやねの上にあがって、しきりに上野のほうをみているようですが、諭吉

は、慶応義塾をこの新銭座にうつしたことが、いかによかったかと、ひそかにかんがえるのでした。

諭吉は、そのまえの年の六月にアメリカからかえってきましたが、そのかえりの船の中で、幕府のわる口をいったというので、きんしん（きまつたすまいから、ある期間、外出をきんじられること）をめいじられました。家の中ではなにをしてもよいが、役所へでてきてはならないというのです。諭吉にとっては、かえって生徒におしえるのにぐあいがよいくらいでした。

幕府は、その十月に、政権（政治をおこなうけんり）を朝廷にかえしました。源頼朝が、鎌倉に幕府をひらいてからは、日本の政治は武士がおさめていて、天皇はただのかざりにすぎなかつたのですが、このときから、天皇を上（かみ）にいただくあたらしい政府が政治をとることになりました。

けれども、諭吉は、あたらしい政府に不安をもっていました。なぜなら、朝廷は、まえから、国をひらくことにはんたいしていたからです。もしも、そのあたらしい政府が、外国をきらい、外国人をおいはらえといいだしたなら、どうなるでしょうか。外国と戦争をひきおこすようなことになり、よわくて小さい日本は、つよくて大きい外国

くに、うちまかされてしまうにちがひありません。

(そうなたら、あの小さい子どもたちがかわいそうだ。)

諭吉は、庭であそんでいるわが子の一太郎と捨次郎のすがたをみながら、かんがえこみました。

(この子どもたちには、戦争といふかなしいめにあわせたくない。日本が、一日もはやく、平和なあかるい文明国になつてくれるとよい。まあ、いまの大人たちはだめだが、わかい人々は、きつと、自分のこゝういう気持ちをわかつてくれるにちがひない。よし、わたしは、わかい人たちのために、あたらしい教育の仕事をしよう。それには本をたくさんかいて、西洋のようすをしつてもらわなければならぬ。)

このように決心した諭吉は、まえよりも塾をさかんにしようとかんがえました。ところが、塾のある鉄砲洲の奥平家のやしきは、外国人のすむところになるといふので、幕府にとりあげられることになりました。そこで、諭吉は、芝の新銭座に有馬というとのさまの土地を買つて、塾をたてたのでした。

そのころ、幕府がたの勝海舟と、朝廷がたの西郷吉之助(隆盛)の話し合ひによつて、江戸城はぶじにあけわたされましたが、それにはんたいの人々がかなり

あつて、彰義隊と名のり、上野の山にたてこもつたりしていました。ですから、いまにも戦争がはじまりそうで、江戸の市中はざわついていました。

こんなときに、ひろい土地を買い、大きな家をたてようとするのですから、人々はどういてしまいました。しかし、仕事のないときですから、大工たちはよろこんでやさいちんぎんではたらいてくれ、なかなかりっぱな塾ができました。それに年号をとつて、「慶応義塾」と名づけたのでした。

そうして、五月十五日、上野では、官軍と彰義隊のあいだに戦争がはじまり、彰義隊は、まけてちりぢりばらばらになり、寛永寺もやけてしまいました。しかし、慶応義塾では、しずかに講義がおこなわれたのでした。諭吉の教育の仕事は、こうして戦火をくぐりぬけて、しだいにくりひろげられていくことになりました。

彰義隊の負けいくさにおわたあと、幕府がわの人たちは、東北地方にのがれ、二本松や会津若松や、北海道箱館（函館）の五稜郭などで、官軍にてむかいつぎつぎにやぶれていきました。幕府の海軍のせきにん者だった榎本武揚も、この五稜郭でとらえられたのでした。

このように世の中がさわがしかつたので、幕府の学校はつぶれてしまっていましたし、

あたらしい政府は、まだ学校をつくることまでには手がまわりませんでした。慶応義塾だけが、西洋のあたらしい学間をおしえていたわけです。そこで、生徒の数も、二百人、三百人をかぞえるようになりました。

そのころのある日のことでした。九州から、慶応義塾にはいりたいと、はるばるやってきた青年がありました。りっぱな身なりからかんがえて、さむらいの子であることはまちがいありません。青年は、ちようどであった町人ふうの男に道をたずねました。

「これこれ、慶応義塾へは、どういけばよいのか。」

きかれた男は、じつにいていねいにおしえてくれました。おしえられたとおりにいくと、いどがあつて、そのそばで、一人のおやじがまきわりをしていました。

「これこれ、おやじ、慶応義塾はここか。そうして入り口はどこか。」
とたずねると、これまた、しんせつにおしえてくれました。

こうして、塾の中へはいつてくると、さきほど、道をおしえてくれた町人ふうの男が、塾頭の小幡先生で、まきわりをしていたおやじが、なんと福沢先生ではありませんか。その青年は、あなでもあればはいりたいほど、ひやあせをかきました。

慶応義塾は、こんなふうには、民主的なふんいきをもっていました。そうして、明治四（一八七一）年に、慶応義塾は、新銭座から三田へうつりました。

あんさつ者が、そこにもいた

諭吉は、三田に慶応義塾をうつしたとき、自分のすむ家もたてましたが、大工にたのんで、家のゆかをふつうよりたかくして、おし入れの中からゆか下へもぐつてにげだせるようにしました。それは、そのころ、ふるい考えをもつ人が、西洋のあたらしい学問をしているゆうめいな人をころすことがはやっていたからです。慶応義塾をひらいた諭吉は、しだいにひょうばんのまよになつてきたので、日ごろから、けいかいをしていたわけでした。

そのまえの年の明治三（一八七〇）年、諭吉は、いのちにかかわるような腸チフスにかかりました。まだすつかりなおりきらないからだで、東京へお母さんをよぶために、中津へでかけました。中津は、ふるさとでもあるし、しんるいやしっている人もおおいので、気をゆるしていました。ところが、この町でも、諭吉はねらわれていたのです。

諭吉ゆきちのまたいとこに、増田宋太郎ますだそうたろうという青年せいねんがありました。十三、四さいばかり年としが下したで、家いえもちかく、朝あさばん、にこにこしてやってくるので、諭吉ゆきちは、

「宋そうさん、宋そうさん。」

とよんで、したしくつきあっていました。この宋そうさんが、じつは、諭吉ゆきちのようすをさぐるためにやってきていたのです。

あるばんのこと、諭吉ゆきちのところにしりあいのおきやくがあつて、お酒さけをのみながら、二人ふたりはさかんにはなしあつていました。そのとき、そつと庭にわにしのびこんで、このようすをうかがっている青年せいねんがありました。青年せいねんは、おきやくがはやくかえつていつて、諭吉ゆきちがねるのをまつていたのですが、話はなしはなかなかおわりそうになく、十二時じがすぎ、一時じがすぎても、おきやくはかえりそうにもありません。

青年せいねんは、とうとうあきらめて、たちさつていきましたが、これこそ、諭吉ゆきちのねこみをおそつてころそうとたくらんでいた宋太郎そうたろうだったので。諭吉ゆきちは、それをこのときにはしらなかつたのですが、四、五年ねんたつてからきかされて、びつくりしました。自分の身みのまわりに、いのちをねらうものがいたのです。

そればかりではありません。家いえの中なかのかたづけをおわつて、諭吉ゆきちは、お母かあさんとめいと

をつれて、東京へかえることになり、船にのるため、中津から四キロメートルほど西の鵜の島までいって、宿屋にとまりました。宿屋のわかい主人は、これを見ると、使いのものをこつそりと中津へはしらせ、

「今夜こそ、福沢をころすのにもってこいの機会だ。」
としらせました。

ところが、この知らせをうけて、中津では、だれが諭吉をころしに行くかで、あらそいがおこり、ぎろんをしているうちに、夜があけてしまいました。これで諭吉は、ぶじに船にのり、いのちびろいをしたわけですが、神戸の宿屋についてみると、東京の塾頭の小幡から、手紙がきていました。

「きくところによりますと、ちかごろは大坂や京都もおだやかでなく、先生をつけねらっているものがあるそうですから、神戸についたら、なるべく人にしられないように気をつけて、すぐ東京へかえつてきてください。」

諭吉は、お母さんに、京都や大阪などを、ゆつくり見物させて、よろこばせてあげようとおもっていただけに、がっかりしました。でも、お母さんに、ほんとうのことをはなしたら心配するので、きゆうな用事ができたことにして、見物をやめ、いそいで

東京にかえりました。

諭吉がねらわれたのは、このときだけではありません。それから二年ほどたって、諭吉が関西にでかけたとき、宋太郎は大坂にきていて、ひそかに諭吉をころそうとするけいかくをたてていました。ところが、宋太郎は、ふるさとのお母さんがおもしろい病気になつたので、きゆうに中津へかえらなければなりません。そこで、なかまの朝吹英二に、この仕事をたのんでかえりました。

朝吹は、ちようど諭吉がとまつた、諭吉のいとこの医者の家で書生をしていました。ですから、諭吉は、大坂にいるあいだは、この朝吹を自分のおともにしていたのです。

(これはうまくいくぞ。)

と、朝吹は、すきをうかがつて、あんさつしようとしていました。

たまたま、諭吉は、わかいころせわになつた緒方先生の家によばれて、朝吹をつれていきました。先生はもうなくなつていたわけですが、先生のおくさまと、なつかしい思い出話をしていられるうちに、夜もふけて十時ごろになりました。おくさまのすずめで、諭吉はかごにのり、そのわきに朝吹がついていました。もう人どおりはなく、さびしい夜ふけの町に、かご屋の足音ばかりが音をたてていました。

(いまだ。)

と、朝吹は刀に手をかけて、すつと、かごにしのびよりました。そのとたんに、

ドドドド、ドンドン。

と、たいこがなりました。ふいの音に、朝吹はびっくりしてしまい、手をひっこめてしまいました。それは、ちかくのよせ（落語や講談などのかかる小屋）のたいこの音で、かえりの人がぞろぞろでてきたので、朝吹はもうどうすることもできませんでした。諭吉は、なにもしらず、家へかえることができました。

こんなことがあつてから、朝吹は、諭吉の話をいろいろときいて、ときにはぎろんをしましたが、だんだん、この人はほんとうに日本のためをおもっている人だ、とかんがえるようになりました。そうして、自分のかんがえていたこと、やろうとしていたことが、まちがっているようにおもわれたので、諭吉にすっかりはなしてあやまり、慶応義塾にはいりました。

これをきいて、宋太郎は、

「朝吹はけしからんやつだ。」

と、はらをたてましたが、その宋太郎も、自分のわるかったことをさとって、諭吉にあ

やまり、やがて慶応義塾にはいつてきました。

「自分のわるかったことに気がついて、あらためるといふのは、りつぱなことだ。」
と、諭吉は、二人をほめました。

このように諭吉は、一どは自分をにくんで、ころそうとまでした人間でも、わるいこととつてあやまってくれば、すなおにゆるしてやり、勉強させたり、身のうえのこまかいめんどうもみてやったのでした。そうして宋太郎は、のちに西南の役で西郷隆盛の部下となり、城山で死んだのですが、朝吹は慶応義塾をさかんにするうえで、なくてはならぬ人になりました。

人間のいのちはたいせつだ

諭吉は、ただしくないこと、ひきようなこと、いくじなし、男らしくないことは、だいきらいでした。ですから、そういうことをみたりきいたりすると、かんしやく玉をばくはつさせて、じつとしていることができませんでした。仙台の洋学者大童信太夫をたすけだしたり、千葉の長沼村の人々のために、力をつくしたこともありますが、ここ

では、その一つのれいとして、榎本武揚えのもとたけあきをすくった話はなしをとりあげておきます。

榎本武揚えのもとたけあきが、北海道ほっかいどうの五稜郭ごりょうかくにたてこもつて、あたらしい政府せいふにてむかい、とらえられたことは、まえにかきましたが、そののち、武揚たけあきは東京とうきょうにおくられ、とりしらべをうけてから、ろうやに入れられていました。

ところが、武揚たけあきの家いえにはなんのたよりもなく、ゆくえさえはつきりしらされていませんでしたから、年としのいつたお母さんかあや、ねえさんやおくさんは、たいへん心配しんぱいしていました。

そこで、武揚たけあきの妹いもうとのおつとである江連えつれという人ひとから、諭吉ゆきちのところへ手紙てがみでといあわせてきました。江連えつれは幕府ばくふの外国がいこく奉行びやくぎやうをしていたので、諭吉ゆきちとはしりあつたなかでした。江連えつれは当時とうじ、榎本えのもとの家族かぞくといつしよに静岡しずおかにすんでいたのですが、手紙てがみには、つぎのようにかいてありました。

「榎本えのもとはどうして居るのでしようか。江戸えどにきて居るといいうわきは風かぜのたよりにきいたのですが、それもたしかめることができません。母ははやきようだいが心配しんぱいしていますので、江戸えどのしんるいにといあわせましたが、だれも、自分じぶんが政府せいふににらまれるのをおそれるか、ただの一どもへんじをくれません。あなたにきいたら、なにかようすがわかるだろ

うと、かんがえて、お手紙をさしあげるわけです。ごぞんじのことがあつたら、どうぞおしらせください。」

よみおわつた諭吉は、きのどくだな、とおもいました。ことに、年とつたお母さんがかわいそうでなりませんでした。

もともと、諭吉は、榎本武揚という人間を調べてはいましたが、ふかいつきあいをしたことはありません。ですから、武揚がろうやに入れられているといううわさはきいたことがあります、べつに、それいじようは気にもとめていなかったのです。しかし、江連の手紙をみて、しんるいのもものたちが、政府にいらまれるのをおそれて、へんじをよこさないということをして、そのひきようなたいどにふんがいました。

(なんとというはくじような、ひれつなやつらだ。幕府の人間は、みな、これだからいけない。よし、おれが一人でひきうけてやる。)

こうおもいたつた諭吉は、すぐに、あちらこちらに手をまわしてしらべました。さいわい、武揚はまだころされず、ろうやにとらわれの身となっていました。

「ころされるかどうか、そのところはともわかりませんが、とにかく、ただいまのところは、病氣もせず、元気でいます。」

としらせてやりました。すると、江連から、

「母と姉が、東京へいきたいといいますが、いつてもよいでしょうか。」

「わたしは、政府から生まれてもかまわないから、どうぞ、東京へでていらつしい。」

諭吉が、こうへんじをかいいたので、二人はよろこびいさんで、諭吉のところへやってきました。そうして、武揚のようすをたずねたり、ひつようなものをさし入れたりしているうちに、武揚のお母さんは、一どでいいから、むすこにあいたいといひだしました。

諭吉は、なんとかして、あわせてやりたいとおもいましたが、どうしたら、あわせられるのか、それがわかりません。あれやこれやとかんがえたとすえ、武揚のお母さんへいがん書というものをかいてださせることをおもいつきました。その文章は、お母さんがかいたもののようにして、諭吉がかいてやりました。

「せがれの釜次郎（武揚のこと）が、朝廷のお心にそむきまして、つみをおかしたことは、まことにおそれおおいことでございますが、釜次郎はひじょうな親思いもので、父が病気のときはよくかんびようしてくれました。この親思いものが、あんな

に大きなつみをおかしましたのは、あくまのしわざでございましょうか、いまさらなげきかなしんでも、もはや、とりかえしのつくことではございませぬ。死刑になりましても、けつしておうらみはいたしません。けれども、わたくしのいのちも、もうながくはございませぬ。できることなら、せがれの身がわりにしていただきたいところですが、せめて、一ど、あわせてはいただけないうか。」

こんなことを、こまごまとかいて、それをねえさんが清書をし、お母さんが、つえをついて、とぼとぼと役所まであるいていつてさしました。これをよんだ役人は、たいへん心をうごかされて、すぐに面会をゆるしてくれました。

さあ、そうになると、諭吉は、なんとかして武揚のいのちをたすけてやりたいとおもいました。すると、たいへんつごうのよいことがおこりました。

ある日、政府の役人が、オランダ語のノートをもってきて、ぜひ、日本語にほんやくしてほしいとたのみました。諭吉は、それをめくつてよんでいくうちに、

「これは、しめたぞ。」

とよろこびました。このノートは、武揚が、オランダへ学問をしにいったとき、勉強した航海術の講義をうつしたものでした。武揚は五稜郭にたてこもったとき

にも、これをだいいじにもつていましたが、いよいよこうさんしたとき、

「国家のために役だたせてください。」

という手紙をそえて、官軍の参謀黒田清隆におくつたのでした。諭吉は、そのノートだとわかりましたので、これをうまくつかつて、武揚をたすけようとおもいついたのです。

そこで、諭吉は、はじめのほうだけすこしほんやくして、

「これは、航海になくはならぬりっぱなものです。しかし、ぎんねんなことに、これは講義をきいてかいたものですから、その本人でないと、わからないところがあります。本人はだれだかしりませんが、これがぜんぶほんやくできたら、わが国にとつてたいへん役にたつものとおもわれます。」

諭吉は、その本人が武揚であることを、ちゃんとしてはいましたが、わざと知らないふりをして、そのノートを政府にかえしました。そうすれば、武揚のいのちがたずかるかもしれないとかんがえたからです。

それとどうじに諭吉は、黒田清隆とはしりあつたなかでしたから、

「どうでしょうか。榎本という男は、たいへんなさわぎをやつたのだから、死刑になつ

ても、しかたがないのだけれども、一どいのちをとれば、あとからどうすることもできない。人間のいのちというものは、なによりもたいせつなものですから、いのちだけはたすけてやったほうが、よいのじやないですか。」

ともちかけました。

「わしも、榎本という男のえらいところははしっている。だが、ろうやに入れられて、生きながらえている気持ちに気がくわれない。どうして、いさぎよく死なぬのだろうか。」

「とんでもない。武揚が死んでしまえば、それつきりです。しかし、あれほどの人間を生かしておけば、日本の国のために、どれほど役にたつかしれません。」

「なるほど、きみのいうことも、一つのりくつだな。」

黒田は、諭吉の話に心をうごかさね、武揚をたすけるために、力になつてくれることをやくそくしてくれました。

こうして、明治五（一八七二）年、武揚は、ゆるされてろうやからでてきました。けれども、そのお母さんは、病気ですでになくなっていました。武揚は、その後、公使や大臣になつて、日本の国に役だつ人になりましたが、その武揚をたすけだしたのは、諭吉その人でした。

てんひと うえひと
天は人の上に人をつくらず

諭吉は、慶応義塾であたらしい教育をし、「文部省は竹橋にあり、文部大臣は三田にいる。」と、せけんていわれたほどですが、それとうじに、出版に力を入れました。本をだして、一人でもおおくの人に、自分の考えをわかしてもらい、西洋のすすんだ文明をとり入れてもらいたいと、いっしょうけんめいにげんこうをかきました。そうして出版社にまかせておいたのでは、そのいいなりのお礼しかもらえないことがわかりましたので、自分で出版社をつくりました。

その出版社は慶応義塾のしき地の中にたてて、主任には、いつか大阪で諭吉をねらった朝吹英二をあて、職工をたくさんやとい入れ、製本所もつくりました。諭吉のかいた本ばかりでなく、すぐれたものはどんどん出版しました。

諭吉が本をかくのは、日本人の考えかたをあたらしくするのがもくてきでしたから、できるだけやさしい文章をかくようにどりよくしました。そうしてできあがった文章は、ばあやによんできかせて、わかるかどうかをたしかめてから、はつぴようすると

いうやりかたでした。

諭吉ゆきちのかいた本ほんはたくさんありますが、その中なかでゆうめいなのは、「西洋事情せいようじじょう」

「世界国尽せかいくにづくし」「学問がくもんのすすめ」などです。これらの本ほんは、どれもやさしくていいのに、だれにでもわかるようにかかれていたので、ひっぱりだこで、人々ひとびとによまれました。

ことに大きおおなえいきようをあたえたのは、

「天てんは人ひとの上うへに人ひとをつくらず、人ひとの下したに人ひとをつくらずといえり……。」

ということばではじまる「学問がくもんのすすめ」でした。

この本ほんで、諭吉ゆきちは、人間にんげんはだれもがびようどうでなければならぬことを、はつきりとかきました。地位ちいとか家いえがらとか、お金かねのあるなしで、さべつがつけられてはならないというのです。そうして、かりに、人間にんげんとしてとうといとか、いやしいとかのくべつがあるとするならば、それは学問がくもんをしたか、しないかのちがいであるから、だれでも学問がくもんをするようにどりよくしようではないか、というのです。

その学問がくもんというのは、ただむずかしい文字もじをおぼえたり、わかりにくいふるくさい文章ぶんしょうをよんだり、和歌わかをよんだり、詩しをつくったりするようなことではなく、「人間にんげんふつう日用にちようにちかき実学じつがく」だといいました。そうでない学問がくもんは、なぐさみの学問がくもん

にすぎないというわけでした。

近代的な考えかたを、そのものずばりにはつきりいつたので、ふるい考えかたの人々は、まっかになっておこりました。しかし、それらの人々の中にも、これをよんでいくうちに、諭吉のかたよらない考えかたや、ただししい意見に感心してくるものもでてきました。

あたらしい政府も、いままでの外国ぎらいをやめて、諭吉の「西洋事情」をさうこうにして、アメリカやヨーロッパの文明をとり入れて、あたらしい政治をおこなうようになりしました。

明治四（一八七二）年には、いままでの藩をやめて、あたらしく県をおくことになりました。とのさまも、政府の役人とおなじになったわけです。そうして、諭吉にたいしては、役人になって、政府の仕事をやってもらいたいと、しきりにたのんできました。諭吉は、病氣といつて、ことわりつづけました。

神田孝平・柳川春三は、諭吉とおなじ洋学者でしたが、政府からたのまれて、役人になっていました。その神田孝平が、ある日、諭吉をたずねてきて、

「どうだ、福沢、もう一どかんがえなおして役人になってくれないか。そうすれば、

ぼくと柳川は、とてもたすかるんだ。幕府とちがって、すぐれたものはどんどん出世もできるし、政府の身分のたかい人も、きみにぜひきてほしいといっているのだ。」

と、ねっしんにすすめました。

「いや、わたしはごめんだね。役人にはなりたくないし、役人で出世したいなど、一どもかんがえたことはない。わたしは平民、ただの国民でいいのだ。」

と、諭吉は、きつぱりとこたえました。

「どうして、きみは役人をきらうのかね。」

「そうだね。まず第一に気にいらぬのは、役人がからいばりをするからだ。」

第二に、きみのまえではいいにくいことだが、役人ぜんたいが下品なことだ。

第三には、幕府にちゆうぎそうな顔をしていたものが、幕府がつぶれると、すぐさまあたらしい政府のほうへついて、すこしでもよい地位をえようと血まなこになつてくることだ。そうして地位があがると、いばりちらす。そのところが気に入らない。

第四には、国民だ。士族はもちろん、ひやくしようや町人の子どもでも、すこしばかり文字がわかるやつは、みんな役人になりたがっている。役人になれぬまでも、政府にちかづいていって、なにか金もうけをしようたくらんでいる。そうして、せつか

くあたらしい世の中になつたのに、国民は役人にへいこらしめている。しつかりとひとりだちをして、自分をたつとぶという精神がない。これでは、日本はひらけない。

わたしは、役人にならないで、ほんとうに自由で、ほんとうのひとりだちの生活とは、こういうものだど、せけんの人々に、ひろくみせてやりたいとおもうのだ。」

「いやに、役人をやつつけるじやないか。まるで、ぼくに役人をやめさせようとしているみたいだ。」

「そんなことはない。きみは、それでいいんだ。きみの考えどおり役人になつたんだからね。自分の考えどおりにものごとをおこなうのが、ほんとうに男らしい人間なんだ。

わたしは、役人がきらいだから、役人にはならない。きみが役人になつたのを、わたしがいせんせいするように、きみは、わたしがい役人にならないのをみとめてくれなくっちゃ、いけない。」

「なるほど、きみのりくつにあつては、まけだ。」

神田は、あきらめて、わらいながらかえつていきました。

こういつた諭吉ですから、ある人が、諭吉のてがらをたたえて、政府がひようしようしなければならぬといひますと、諭吉は、

「とんでもない。わたしは、自分が好きだから、塾をひらいたり、本をかいいたりしてきたわけだ。それをほめるとか、むくいるとかいうのは、おかしい。とうふ屋がとうふをつくり、車屋が車をひくのと、おなじことではないか。わたしをひようしようするといふのなら、そのまえに、となりのとうふ屋からひようしようしてもらいたいものだね。」

諭吉は、このように役人にはならず、せけんといっぱんの人々とともに生きながら、教育者として、また本をかいいて、自由と民主主義の光をたかくかかげて、どうどうとすすんでいきました。西南の役もおわつた明治十二（一八七九）年の七月には、国会論をかきあげて、慶応義塾の出身者がへんしゅうしている報知新聞に、社説として一週間ほど、毎日はずつぱようしました。

福沢諭吉の名まえはださないで、文章も諭吉がいたのだと、わからないようにくふうしてのせました。これはたいへんなひようばんになって、国会をひらかなければならぬというぎろんが、ひじょうにたかまつてきました。

そのため、政府も、明治十四（一八八一）年に、国会を明治二十三（一八九〇）年にいよいよひらくというやくそくを、しなければならなくなったほごでした。

諭吉は、さらに明治十五（一八八二）年に、「時事新報」という新聞を発行し、政治・教育・外交・軍事・婦人もんだいなどについて、論文をのせました。

女の子でどうしてわるいか

「ああ、また、しようじをやぶつたな。なかなか元気があつて、見こみがあるぞ。」
 「まあ、元気があつてよいなんておっしゃつて。女の子ですから、もうすこし、おとなしくしてくれるといいんですけど……。」

「いやいや、女の子だつて、元気があつるほうがいいよ。」

諭吉は、自分のむすめが、しようじをやぶるのをながめながら、おくさんと、こんな話をかわしながら、よろこんでいました。ふつうのうちのお父さんだったら、子どもがしようじをやぶつたり、いたずらをしたりしたら、たいていは大きな声でしかるものですが、諭吉はちがっていました。

明治十六（一八八三）年、諭吉は五十さいになつていましたが、この年の夏、四男の大四郎が生まれたので、諭吉は四男五女、あわせて九人という、おおぜいの子だからにめ

ぐまれました。その子どもたちを、わけへだてなく、かわいがったのはいうまでもありません。

子どもたちは自由でかつぽつであつたほうがいい、と諭吉はかんがえていましたから、おくさんともよくはなしあつたうえ、きるものはそまつにしても、えいようだけはじゅうぶんにとらせるように気をつけました。

ですから、家の中で、子どもがあばれまわつても、いっこうにしかりません。勉強

よりも、からだをじょうぶにすることのほうがだいじだ、と諭吉はかんがえていたからです。そこで、子どもが、八、九さいになるまでは、おもうままにあばれさせて、からだをじょうぶにすることだけを、いちばんのもくひようにしました。七、八さいになると、はじめて勉強をさせることにしましたが、もちろん、からだのことは、いつも気をつけました。したがって、福沢家では、

「きょうは、おとなしくよく勉強したね。」

などといつて、ほめられることはありませんでした。それよりも、小さな子どもが、「きょうは、遠足があつて、とてもおかつたけれど、がんばつてあるいて、先生にほめられました。」

とか、その上の子が、

「きようは、たいそうがあつて、走りきようそうで一ばんになりました。」
とかいうと、

「それはえらかつたね。では、ごほうびをあげよう。」

こういったちようしで、勉強よりも、うんどうができたほうが、ほめられるのでした。

それから、家の中では、ひみつなことはいつきいらないということにしています。なんでも、ざつくばらんにはなしあうことにしています。ですから、諭吉が子どものわるいところをとがめると、子どものほうも、諭吉のわるいところをいうというありさまで、ほんとうにあかるい家庭でした。

そのころ、しつけのきびしい家では、主人が外出するときは、家じゆうのものがげんかんにおくつてでて、手をつけておじぎをしたり、かえつてきたときには、また、げんかんにでむかえるというのがならわしでしたが、諭吉は、けつして、そんなことはやらせませんでした。諭吉は外出するといつても、げんかんからでるとはきまっています。台所からさつさとでていくことだつてありました。かえるときも、そのとおりで、

そのときの足のむいたほうからでていたり、はいつたりしていました。

あるとき、出入りの商人がきて、いいました。

「先生、わたしのうちには、また女の子が生まれました。こんどこそ、男の子が生まれてほしいとおもつていましたので、がっかりしました。」

これをきいた諭吉は、

「女の子で、どうしてわるいのかね。じょうぶでさえあれば、いいじゃないか。せけんでは、男の子が生まれると、『たいそうめでたい。』といい、『女の子であつてもじょうぶなら、まあまあめでたい。』などといっているが、わたしは、そんなつもりでいつているのではない。男の子と女の子のちがいがあろうわけがない。そこにかかるいおもいはないはずだ。わたしは、九人の子がみんな女の子だつて、すこしもぎんねんとはおもわないね。ただ、男の子が四人、女の子が五人というふうに、半分ずつで、いいあんばいだと、おもうだけだ。女の子が生まれて、がっかりすることなんてないな。」

「先生のお話をおききしてましたら、なるほど、女の子でもわるくないという気がしてきました。じつは、家内が、女の子が生まれたというんで、わたしいじょうにがっかりしているところです。ありがとうございました。さつそく、家にかえつて、家内に先生

のお話をきかせてやって、元氣をつけてやります。」

その商人は、いそいそとかえつていきました。

諭吉は、口さきでいうだけではなく、毎日の生活でも、ざいさんをわけるときにも、男の子と女の子をすこしもくべつせず、まったくおなじでした。それは、諭吉が、女性を見くんだりはけつしてしなかつたからにちがいありません。そこで諭吉は、おくさんをそんけいし、諭吉夫婦はひじょうになかよく、むつまじくくらししました。諭吉は一夫一婦をしゆちようし、もちろん、自分でもそれを実行しました。

このように諭吉は、民主主義というものをよくりかいし、これを、せけんの人々にわかりやすい文章でといたただけではなく、自分で実行したのでした。それを、すべてのことにわたって、つらぬきとおしていきました。

諭吉は、くんしようだの、しゃくい(きぞくのくらい)だのというものが、だいきらいでした。くんしようをぶらさげていても、どうということはないとおもっていましたし、明治になって、やつと身分からかいほうされたのに、またまた、しゃくいをつくつて、身分のくべつをつけるというのは、こつけいなことだとおもっていたからです。

明治三十一(一八九八)年に、諭吉は脳出血でたおれ、いのちがあぶないとつたえ

られたとき、政府は、諭吉に、しやくいをさずけようと思いました。その知らせがあつたとき、家族をはじめ、慶応義塾の人々は、諭吉の考えをよくしつていましたので、そ
うだんのうえ、それをことわりしました。

諭吉は、さいわい、よくなりましたが、この話をきいて、

「ああ、よくことわつてくれた。」

と、心のそこからよろこびました。

こうして、明治三十四（一九〇一）年、諭吉は、六十八さいの正月をむかえました。それは、あたらしい世紀、二十世紀のはじめの年でした。

慶応義塾のわかい学生たちは、ふるい十九世紀をおくり、あたらしい二十世紀をむかえるために、一九〇〇年十二月三十一日、にぎやかな会をひらきました。そのうちに夜はあけて、一月一日、年始のあいさつにきた人々に、諭吉はいいました。

「いよいよ二十世紀だ。十九世紀の日本は、封建制度がつづき、これをなくするため
に、ずいぶん、ごたごたした世の中だった。けれども、日本はあたらしい世の中をむか
えたのだ。ふるいことはみんなわすれさつて、かくごをあらたにしてがんばろうではない
か。」

諭吉の目はあかるくかがやき、希望にみちた顔は、とてもわかかわかしくみえました。ですから、

「福沢先生は、元気になされた。」

と、だれもがあんしんをし、よろこんだのでした。

ところが、その一月もおわりにちかいころ、諭吉は、きゆうに病気でたおれました。脳出血が、ふたたびおこったのでした。そうして二月三日、とうとうその一生をおわりました。

おもえば、福沢諭吉こそ、民主主義の光をかかげた、明治の大きなともしびでありました。いや、明治だけではなく、大正、昭和とつづき、今日のわたたくしたちにとつても、なお大きなともしびであるといわなければなりません。

(おわり)

青空文庫情報

底本：「福沢諭吉」講談社火の鳥伝記文庫、講談社

1981（昭和56）年11月19日第1刷発行

2009（平成21）年2月9日第51刷発行

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2011年11月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

福沢諭吉

ペンは剣よりも強し

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 高山毅

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>